我々は、大勢であるがゆえに

コーギー軍曹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我々は、大勢であるがゆえに

【Ｎコード】
Ｎ３９３４Ｕ

【作者名】
コーギー軍曹

【あらすじ】
ある男が、神様によってとある世界に送られることに。しかも、その体は人間ではなく地球外生物だった。　【宇宙のバランスのために。】そう言われて送り込まれた男が、気分のままに生きていく。
初投稿になります。文章と主人公の口調、並びに１人称がブレまくります。どうしてもやってみたかった。反省も後悔もしていない。拙い文章力ですが生温かい目で見守ってください。
※注、この作品には途中から人化入ります。苦手な方は気を付けて

下さい。
ＴＳもあるよ。

プロローグ1（前書き）

はじめまして。初投稿になります。まだ慣れないことも多いので、生温かく見てやってください。

ゲーム自体やったことがないので、情報媒体はマンガやＳＳなどが主なのであほな間違いをするかもしれません…。

よろしくお願いします。

プロローグ1

プロローグ1

その日、俺は目が覚めると、なにもない真っ白な空間にいた。
「・・・何でこんな・・・ところに・・・？俺は・・・確か・・・。」
頭がぼんやりとしてすぐに思い出すことができない。
「・・・俺は・・・大学に行って・・・授業を受けて・・・部室に行って・・・アパートに帰って・・・それから・・・。」
最後に見た光景を思い出してゆく。
「・・・普通に部屋で寝たよな。ここどこだ？」
ただ、ひたすらに白く広い空間が、どこまでも広がっていた。

「歩くか。」
とりあえず今は、まっすぐ歩きつづけることにした。

3時間ほど歩いて全く疲れていないことに気付いた。これは夢なのだろうか？
歩きながら左手の甲を右手でつねった。
「夢じゃないみたいだな。痛いし。
これは誘拐か？うちは普通の家庭だから、身代金なんて払えんぞ。
じゃあ、拉致か？北のやばい奴らにでも捕まったのか？
明日も大事な講義あるんだけど、それまでに帰れるかな？」

2，3時間ほど歩いたが、何もなかった。
どこまで行っても白しか見えない。そろそろいやになってきたので、とりあえずその場で横になることにした。
ここの床（地面か？）は、思ったより硬くない。むしろ柔らかいくらいだ。
思いのほか寝心地が良かったためか、俺はすぐに眠ってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【・・ろ。いつ・・寝て・だ。】
何だ？何か聞こえる。
【お～い起きろ。いつまで寝てる気だ。】
女の声だ。しかしだれだ？
俺は一人暮らしで、しかも女性の友人はいないから、起こしてくれるやつなんていないはずだが？
・・・リア充、自然発火しないかな。
【あほなこと言ってないで、さっさと起きろ。】
・・・・！！
「しまった！レポート提出明日までだった！早くやらないと！ってか今何時！？」
勢いよく起き上がる。
【なに寝ぼけてるんだよ。】
「・・・何だ？」
目の前には幼女がいた。しかも光ってる。
そしてかなり可愛らしい！（。∀。）o彡。ヨージョ！ヨージョ！
【ようやく起きたか。　おはよう、幸運な人間よ。】

「・・・きみは誰だい？」
【我は神だ。】
・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
「うわぁ・・・。」
どうやら痛い子（中二病）のようだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【おい！】
「・・・はい何でしょう？」
【我は中二病ではない！】
「中二病を患った人は皆そう言うものですよ。」（?∀?）ＨＡＨＡＨＡ
【私は本物の神様だ！】
・・・だめだこいつ、早く何とかしないと・・・。
「つーか一人称が【我】から【私】になってるぞ。神様のキャラでも作ってたのか？
まあ、だれもが一度は通る道だ。気にすることはないぞ、中二君。」
【いい加減にしろ、このやろう。　ひねり殺すぞ。】（#｀Д）ムキー！
　おお、こわいこわい。この程度でキレるとは、まだまだ青いな。
【何がだよ！】
・・・そういえばレポート終わってなかったんだった。適当にな

だめて帰り道を教えてもらおう。
【帰り道なんかないぞ。】
「なん・・・だと・・・。あれ？今の声に出てた？」（，・ω・、）？
【いや、でてないぞ。我が心を読んだだけだ。】（、・ω・，）ドヤ
心を読むだと！こいつニュータイプか！すごいな、中二病。ニュータイプになれるとは。流石に神様（自称）は格がちがった！
【もういやだこいつ。】

「ところで神様、ここは何処なんです？天国とかその辺ですか？自分死んだ覚えはないんですが？」
【こいつ、急に態度かえやがった。私のことさんざん中二病とか言ったくせに。】
「いやですね～。ちょっとした冗談ですよ、冗談。そもそも発光する人類なんていないでしょう？だから人類以外の何者か、という意味で？神様〃です。」
【やっぱりこいつ、きらいだ～。】（／□≦、）エーン！！

プロローグ1（後書き）

無駄に文が長い希ガスル。
ほとんど中身なかったですね。（┌Д┐；

プロローグ2（前書き）

プロローグ1の続きです。
どうぞ。

プロローグ2

プロローグ2

「それで？一体なんの用なんです？」
隅っこ（この空間に隅なんて無いが）でひざを抱えていじけている、神様（ようじょ）に話しかける。
【お前なんか嫌いだ。ここで寂しくなって死んでしまえ。】
「ウサギじゃないんだから、寂しい位じゃ死にませんよ、神様（笑）。」
【・・・ぐすっ。】（ノД｜。）
泣いちゃった。それでいいのか神様（苦笑）
【・・・ひっく。】
流石にこれは行かんな。自分は紳氏なのだ。
幼女を泣かせたとあっては、世界中の紳士達（という名の変態）に怒られてしまう。
【・・・幼女？】
「ん？　何か言いましたか？」
【ちょっと待て！今お前には我は幼子の姿に見えているのか！？】
「ええ、そりゃもう。しっかりと。」
【・・・】（。Д。）ポカーン
自分の姿を見て固まってしまった。どうしたのだろうか。
【姿変えるの忘れてた・・・。】
なんだ、そんなことか。
【なんだとはなんだ！この姿では？いげん〟が全然ないではないか！】
「大丈夫ですよ。今みたいに光っていれば、威厳あるように見えますし。」
【ほんとうか？】

「ええ。ほんとですとも。」
【うそじゃないな！】
「嘘じゃありませんよ。」
【そうかそうか。】（＝＾▽＾＝）
あつかいやすいな～この神様（という名の幼女）。
「そろそろ本題に入ってもらってもいいかい？」
【おお。そうだったな。】（＊（▽（＊）ニコニコ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【それじゃあ、いきなりで悪いけど、君にはとある地球外生物になってほしいんだ。】
「地球外生物？それってエイリアンとか？」
【まあ似たようなものだよ。私たちは、宇宙の変化をうながすために、時々別宇宙の生き物を送りこむんだ。そのさい、ある程度ちせいがあったほうがあつかいやすいのさ。】
「何で俺なんです？。」
【色々あるけど、まず寂しくてもだいじょうぶな人。寂しさで死んじゃったらもともこもないしね～。
それと、もし人間を殺しちゃってもこうかいして自殺、とかしない人。
あとは、神様を否定も肯定もしない人かな。これは日本ではおおいよね～。
そんな人間の中から、くじで選んだのさ。】
「くじですか。」
【うん。だからはじめ、幸運な人間って言ったんだよ。】
それは運がいいと言えるのか？

「・・・その生物って弱いんですか？」
【弱くはないよ。君の世界の地球なら、どの生き物よりも強いよ。だけど、けっこう特殊だからね～。】
「はあ。そう言えば、その世界ってどういうところなんです？」
【う～ん、そうだね。実を言うと今その世界では、とんでもないはやさで生き物の種類がへり続けているんだ。
神様といえども、１度ほろんだ生き物をふっかつさせることは、やっちゃいけないんだ。
でも、このままへり続けちゃうと宇宙のバランスがくずれちゃうからさ。
だから、別世界の生き物を送ってバランスをとるんだ。
だからどちらかと言えば危険なところかもね～。
まあ、とりあえず行けばわかるよ。】
「何か色々と心配なんですが？」
【だいじょーぶ。私が少し手を加え（魔改造した）おいたから。】
「……。」
【細かいことは気にせず自由に生きればいいよ。
あ、言うの忘れてたけど、君は元の世界では死んだことになってるから。心臓マヒで。
じゃあ、行ってらっしゃーい。】（＾▽＾）ノシ
神様（という名の幼女）がそう言うと、俺は意識をうしなった。

プロローグ2（後書き）

やっとプロローグ終わり。
もっと短くするはずだったのに。ｏｒｚ

第一話　シリコンてどんな味がするんだろう。（前書き）

ようやく本文です。

ご都合主義や独自解釈が入ります。

第一話　シリコンてどんな味がするんだろう。

その日、地球に一つの隕石が落下した。そして、それは北の地、シベリアの大地に落ちた。
その中から5メートルほどの大きさの、蟲のような甲殻を持つ生き物が這い出し、地面へと潜っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（ここはどこだ？　あの神様は？　何か妙に暗いな。
ん？　土？　何で？
……なんだ、地下だからか。
……？
え？　地下？　何で地下！？）　Σ（゜Д゜；）？？
意識を覚醒させて、急いで這い出る。
「なぜいきなり生き埋め！？あの神様（笑）何してんだ！殺す気か！」
土を払い落すため、自分の体を見る。
すると妙なことに気付いた。
・目の前に突き出た角。
・白っぽい硬い甲殻に覆われた体。
・鋭い槍のようなものが着いた後ろ足。
・顔の周りにパラボラ状に配置された干渉波クロー。
……

……
……
「か、鏡。鏡はどこですかー？
……。
いや、見なくてもわかるんだけどさ……。
地球外生物って……これ……レギオンじゃないですか！！」
どう見ても映画『ガメラ2』に出てきたマザーレギオンです。
「まずい！
こんな姿誰かに見られたら政府につかまって解剖されてしまう。
（（ ；゜Д゜））ガタガタ。
確かレギオンは隕石みたいに地球に落ちたんだよな。じゃあそれを見た誰かがここに来るかも。
急いで移動しないと……でもどうやって地面に潜るんだ？」
すると、頭の中に潜り方が浮かんできた。
「急げ急げ！」
（特に問題もなくすんなりと潜れた。まあ、雪や土が馬鹿みたいに舞い上がったけど。
とりあえず今は移動を第一に。後のことはそれから考えよう。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから2時間ほど地面の下を掘り進んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「これ位離れれば大丈夫かな。はぁ～。」
土の下でため息をつく。
すると、気を抜いたせいか、急に眠気が襲ってきた。
「一眠りしよう。　～ｚｚＺ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１０時間ほど寝ていただろうか。空腹によって目が覚めた。
「レギオンの食糧ってシリコンだったよな。映画ではガラスとか食ってたっけ…。
周りに誰もいないよな？」
恐る恐る地面から顔を出す。
成体になってはいないとはいえ、約５メートルはある巨大な生き物が、地面からびくびくしながら顔を出している光景はとてもシュールだっただろう。
「ちょっと遠くに街が見えるな。でも何だろ、さっきから何か変な音？が聞こえるな。」
先ほどから、「ザー」や「ガー」というような音がよく聞こえる。

地面に潜りつつ、少しずつ接近していく。
（おかしいな。全然人の気配がしない。）
街から1キロメートルほど離れたところで顔を出すと、ようやくその訳がわかった。
「まるで廃墟だな。」
街はひどい有様だった。
建物は崩れ、道は陥没し壊れた車が横倒しになっている。
「紛争でもあったのかな。ところどころ戦車の残骸みたいなものが見えるし。」
周りを見回しながら足を進める
「お！あった、あった。」
酒場だったのだろう建物をのぞいてみると、その中に大量の酒瓶を発見した。

「壁が崩れててよかった。じゃないと入れないし。」
顔を瓶に近付けてシリコンを吸収する。
「結構な量があったのにな。成長期なんだろうか？
成体は全長１６０メートルだったから、けっこうな量がいるんだろうな～。
そろそろ土から（シリコンを）摂取できるようにしとかないと、食糧が足りないかな。
……。
それにしても、建物の屋根と目線が同じか。体高は３～４メートルぐらいかな。
マザーの成体が体高１４０メートルだったから、まだ大きくなるのか。」
街中を歩いていると、またあの妙な音のようなものが聞こえた。
かなり近いようだ。
「これか？」
それは大きめの無線機だった。
「そう言えば、レギオンは特定の電磁波を出すものを敵と認識するんだっけ。
確かに、映画のレギオンなら、すぐに都市へ攻撃しに行っただろうな。
流石に俺はそんなことしないけど。でも、煩いから壊しとこう。」
前足でその無線機を踏みつけ、破壊した。

この街に誰もいないことを確認し、割れた窓ガラスを食べつくし、また地面に潜っていった。

第一話　シリコンてどんな味がするんだろう。（後書き）

レギオンかわいいよレギオン。レギオンはぁはぁ。
まるで甲殻類を思わせる硬そうな甲殻。はぁはぁ。

ハッ！自分はいったい何を！？

……とりあえず、種と一緒に隕石として落ちた後、卵から孵化したばかりなので少し小さめになっています。（でもソルジャーの二倍以上の大きさ。）

レギオンの資料って意外と少ないんですよね。
結構人気ありそうなのに。

第二話　収束砲を撃つときは人や建物が無いかをよく確認しましょう。　え？撃

二話目です。
ドーゾ

第二話　収束砲を撃つときは人や建物が無いかをよく確認しましょう。　え？

「どうもみなさんこんにちは。
歌って踊れる地球外生命体ことマザーレギオンです。
今日も私はガラスを探して地中を爆進中です。
まあ、時速5キロメートルほどですが。（笑）」
え？　テンション高すぎないかって？
……。
早速ですが、もう限界です！
……暇すぎます！！
こっちに来てからぜんっぜん娯楽がないんです。
確かに地面に潜れてすいすい動き回れると言うのはすごく面白い。
干渉波クローをわきわき動かしたり、後ろ足前後に動かしたり。
すごく楽しいです。いや、楽しかったですよ。
でもね、やっぱり自分の体なんですよ！
いくらなんでも、指や足を曲げたり伸ばしたりして1時間以上潰せますか？
1時間どころじゃないです。3時間4時間暇な時なんてざらですよ。
街を見つけても大体荒れ果ててるし、ほとんど物が残ってないし。
……。
大体、何で此処に来てから3日も経つのに人っ子一人出会わないんですか？
もしかしてあれですか？
『199X年、世界は核の炎に包まれたぁ！』な世界なんですか？
世紀末覇者とかいるんですかぁ？
モヒカンな人たちが「ヒャッハー！」とか「汚物は消毒だー！！」とか言って改造単車乗り回してんですか？

……意外といそうだから困る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そんな訳で暇なんです。
最近は暇すぎて、世界の中心で何かよくわからんことを叫んだり、地上を全力疾走したり。

そんなことしかしてません。
……はあ。

！！！　そうだ思い出した！！　ちょうどいい暇つぶしがあった！！
「マイクロ波シェルを撃ってみよう！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ちょうどよさげな平地を見つけたので、練習始めたいと思います。
ちなみにマイクロ波シェルとは、映画でもおなじみ、顔の前の触角をパカッと開いて撃ちだした、青い色のビームっぽいあれです。
あれはマイクロ波を収束して撃ちだすもので（メーザー？）、そ

の威力は、ガメラの右肩の甲羅を粉砕し、陸自の戦車大隊の約5割を一撃で消し飛ばし、足利のジャスコを破壊したほどである！
これはぜひ撃ってみたい。
もしスペシウム光線が撃てるようになったら、誰もが1度は撃ってみたいとおもうだろう。
そんな感覚だ！

よし、じゃこっちの地平線に。
「パカッと開いて力を込めて…
発射――！！！」
ビシー！（発射音）ピシューン！（地面に当たる）ドゴーーン！！
（大爆発！）

Σ（゜д゜；）　ヌオォ！？
これはまた、とんでもない威力。そして射程。地平線に届いたYO。
成体に比べればまだ威力は低いだろうが、この大きさの生き物が撃つ攻撃にしては威力ありすぎだろう…。
戦車の5，6台は吹っ飛ばせそうだ。
これはしばらく封印かな。もしくは威力をセーブする練習するか。
「…しばらくは暇をつぶせそうだな～。」

「ん？　あれ？　もしかして何かに当たった？」
よく見ると何かが吹っ飛んだようだった。
「……」？（「□」；）　アセアセ

「やべぇ。もしかして車か何か、かな？　だとしたらまずいよなぁ…。

……。

よし、見なかったことにしよう。」

そう言うと静かに頷いて、地面に潜り、全速力で逃げた。

第二話　収束砲を撃つときは人や建物が無いかをよく確認しましょう。　え？撃

あれ？
そう言えば、まだＢＥＴＡどころか人間とも遭遇してない。
テ有価、主人公に名前つけてない…。
…。
ま、いいよね。

第２．５話　誰に見られてるか分かったもんじゃない。（前書き）

主人公が収束砲撃ったとき、そこでは何が起きていたのか。
ありきたりな感じですが、２．５話目です。
ドーゾ

第２．５話　誰に見られてるか分かったもんじゃない。

～Ｓｉｄｅ：ソ連軍衛士～

私はソ連の衛士だ。私は戦術機を駆り、前線を突破してきたＢＥＴＡを駆逐していた。

今回の出撃も、前線から漏れてきた小型種を撃破するだけだった。

そのため、武装も小型種を相手にするのには、十分な物を装備していた。

しかしそれがいけなかった。

小型種しかいないと報告されていたはずの群れの中に、次第に大型種が現れ始めた。

３６ｍｍだけでは対処しきれなくなっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「くそっ！　何が小型種だけだよ！　要撃級が１０匹はいるじゃねーか！！

報告した奴らの目玉は、腐ってんのかよ！！」

「落ち着けニコライ！今は黙ってこいつらを排除するだけだ。」

「だけどよイワン！もう弾が切れそうなんだ！　俺はナイフも持ってきてねぇし！

それにこの旧式（バラライカ）の機体じゃ長いこと持たねーよ！！

隊長、援軍は来ねーんですかい？」

部下のニコライとイワンが、足元にむらがる戦車級を蹴り潰しながら、通信してくる。

「無理だ！　本部も前線の維持で手いっぱいらしい。

こっちには弾1発送る余裕はないそうだ！」
近づいて来る要撃級を撃ちぬきながら、答える。
そう、我々は最低限の武器と弾薬しか持たされてはいなかった。
それほどまでに、我々には余裕が無かったのだ。
「しかし、このままでは。　っ！　ニコライ、避けろ！！」
「何！　がっ！・・・」
死角から接近していた突撃級がニコライの乗る戦術機を弾いた。
「ニコライ！！」
「…だ、大丈夫、です…。俺はまだ…生きて…ますよ…。」
弱弱しいが、返事は返ってきた。
ギリギリで回避したのか右腕が吹き飛んだだけのようだ。

だが、戦闘続行は不可能だろう。
「イワン！ニコライを連れて1度本部まで下がれ！」
突撃級の背中を撃ちぬきながら指示を出す。
「しかし隊長！」
「お前の機体もこれ以上の戦闘は無理だろう。」
イワンの機体もすでにボロボロになっており、何時動かなくなってもおかしくない状態だ。
「ただし、弾は置いていけ。私がここを抑える！」
「ですが！！」
「これは命令だ！　それに、今のお前では足手まといだ。」
「くっ…。
わかりました。　すぐ戻ります。
だから、それまで死なないで下さいよ！」
弾薬を私に渡したイワンは、ニコライを機体から脱出させ、本部へ下がっていった。
「ふっ、まだ恋人もいないんだ。こんな処で死ねるわけがない。
……。
さあ来い、蟲ども。ここから先は、1歩たりとも通さん！！」

３６ｍｍを乱射し、群れへ飛び込む。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

どれほど経っただろう。
とうに弾は尽き、ナイフ１本で戦っている。
「これで……最後だぁ！！」
最後の１匹を刺し貫く。
それと同時にナイフが砕けた。
「はあ……はあ……はあ……。　これで…終わりか…。」
戦いを終えて一息ついた、その時。
ズガンッ「なにっ！！」
その瞬間ＢＥＴＡの死体の山の中から２匹の要撃級が飛び出し、モース高度１５の腕を奮い、私の機体の足を砕いた。
衝撃が私を襲う。
目の前が赤い。どうやら頭をぶつけた様だ。
最早武器もなく、満身創痍の状態の私に反撃する力など残っているはずもない。
「イワン…ニコライ。すまない。後は、任せたぞ…。」
死を覚悟し、要撃級が私を叩き潰すのを待った。

その時だった。
私の目の前を青い光が駆け抜ける。

ドゴーーン！！
目の前にいた要撃級はけし飛び、その爆発に巻き込まれもう１匹も吹き飛んだ。
「何、だ？　レーザー、なのか。　いったい何が…。」

その青いレーザーが放たれたと思われる方向を見る。
地平線に何かがある。
「最大望遠。」
すると、いたのである。
まるで甲殻類、蟲のような甲殻をもつ、白銀色の生物が。
「ＢＥＴＡ、なのか？　ならなぜ、私ではなく要撃級を…？」
外見からしてＢＥＴＡとは思えない。
しかし、あんなものを撃てるのは、この地球ではＢＥＴＡ位しかいない。
じっとこちらを見ていた（と思われる）その生物は、まるで殲滅を確認したかのように、静かにうなずくと、地面に潜っていった。
それを最後に私は気を失った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ここは…？」
私は白いベッドの上で目を覚ました。
「た、隊長。」
「ん？　…ニコ…ライ？」
「隊長ぉ。　おいっ！　隊長が目を覚ましたぞ！　早く先生を連れて来い！
イワン、おいイワン！　隊長が目を覚ましたぞ！」
「っ、隊長！　よかった。本当によかった！」
……#ビキッ
「煩いわ馬鹿ども！　此処を何処だと思ってる！」　ガンッ×2
目の前で騒ぎ立てる2人の部下を叩いて黙らせる。
「い、痛いです。」
「当たり前だ馬鹿もの。　恥ずかしいからはしゃぐな！」

「ひ、酷い。」
……。

「それで、一体あれからどうなったんだ？」
２人を落ち着かせてから話を聞く。
「はい。先に戦場から離脱した後、ニコライを基地に放り捨てて「おいっ！（ニ）」煩い。
戦闘車両を使って隊長の援護に向かおうとしたんですが、基地のほうでなにかトラブルがあったらしく出るのに時間がかかってしまい…、たどり着いた時には、すでに、隊長１人で奴らを殲滅した後でした。　自分は、戦術機の中で気絶していた隊長を車に乗せ、基地まで帰還しました。」
「何？」
「凄いですねぇ、隊長。あの数の奴らを１人で全滅させて、足１本で済ませるなんて。
しかも、その戦果を鑑みて中尉に昇格だそうですよ。俺たちも鼻高々でさぁ。」
「……。」
「どうしました、隊長？」
「…ニコライ、すぐに基地司令に報告だ。」
「それなら、俺がやっておきましたよ。」
「いいから、呼んで来い！とにかく報告しなければならないことがある！」

この日、ユーリヤ・ノルシュテイン少尉により、とある生物の存在が報告された。
その生物は、１０メートル程度の大きさでありながら、重光線級と同じかそれ以上の威力のレーザーを撃つという。
その能力から、新種のＢＥＴＡではないかと軍内部で議論された。

しかし、要撃級のみを狙ったことから、ＢＥＴＡでは無い、もしくはＢＥＴＡの変種のようなものではないか、との意見も多く、これ以上は新たな報告がなければ分からないとして、謎の生物をその姿から、
『白ムカデ：ベールィストーノシカ』　と呼称することとなった。

第2．5話　誰に見られてるか分かったもんじゃない。（後書き）

あれ？
なぜか主人公書くよりスラスラ書けたんですが……。

え～、とうとう主人公見つかってしまいました（笑）
マイクロ波シェルが当たった時、主人公には『何かにあたったかな～』程度にしかわかっていません。
実は無意識のうちに、無線が使われていた方向に向かって撃っていました。
なので、もしかしたら戦術機を撃っていたかもしれません。
ワリトアブナイネ～。

ところで、
主人公の名前、どなたか考えてくれませんか？
……。
イエ、別ニ考エルノガメンドクサイワケジャナイデスヨー。

第三話　「仲間が増えるよ。やったねレギオン」　『オイ、バカヤメロ』（前書

タイトルについては……。
うん。何も言わないでください。

三話目デス。
ドーゾ

第三話　「仲間が増えるよ。やったねレギオン」　『オイ、バカヤメロ』

前回の『砲撃が何かに当たっちゃったよ事件』から４日ほど経った。

「占～拠、占拠、明るい占拠～♪」

……。

「いやあ～、歌はいいね～。まさに地球人（リリン）の文化の極みだねぇ」

なぜ歌った……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

前回、砲撃を撃った後、最初に見つけた街に戻ると、近くに割と大きな工場があったので、そこを拠点にすることに決めた。

運のいいことにその工場はガラス工場だった。

作りかけのガラスや、その材料が多量に残っていたのからしばらくは食糧に困らないだろう。

それと、体が大きくなっていた。

初めのうちは５メートルほどだったが、今では全長１５メートルほどである。

全高は１２メートルほどだろうか。

前世では１６０後半程度の身長しかなかった自分にとって、目の高さが１２メートルもあるというのは、いささか落ち着かないものがある。

しかし、これからまだ大きくなるはずだ。今のうちに慣れておかねば。

それにしても、わずか7日で身長が倍になるとは。
やっぱり食った分だけでかくなるんだろうか？
人間では考えられん成長スピードだ。
やっぱり人外なのだとしみじみ感じますね～。
よし。
今は兎に角体を大きくしよう。
体が大きいということは、中々襲われにくいということでもある。
この世界に15メートルの化け物を捕食しようとする奴が居るとは思わないが、万が一ということもあるからな。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれから5日ほど経ちました。
只今の目線の高さは17メートルほど。
つまり全長は20メートルを超えているはずです。
そんな自分が今何をしているかというと。

「寂しいな」ボソッ
つい声に出てしまった。
そう、寂しがっています。

流石に10日以上誰とも会話していないと心細くなってくる。
おかげで独り言がとても多くなってしまった。
「やっぱりあの時（砲撃時）逃げずに近寄ってみればよかったな。
でも今更行くのも何か恥ずかしいし…」

所詮はヘタレである。
「話し相手が欲しいな…」（´△`）ハァ－
そう呟いて、今日も眠りに就く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ごそごそ。ごそごそ。
（ん～？何の音だ？）
ごそごそ。ごそごそ。
ごそごそ。ごそごそ。
（野生動物でもはいりこんだかね～？）
ごそごそ。ごそごそ。ごそごそ。ごそごそ。
ごそごそ。ごそごそ。ごそごそ。ごそごそ。ごそごそ。ごそごそ。
＃ピキ
「煩いわこのアホンダラ！命が惜しけりゃ静かにせんか馬鹿モンがー！！」
（゜皿゜メ）　ウラァァアア！！
あまりの鬱陶しさについキレてしまった。
でも、まあこれで出ていくでしょう。
「…うん？　何ぞこれ？」

目の前（と言うよりすぐ真下）で黒っぽい紫色をした、虫のようなものがごそごそと動いていた。
（さっきからしている音はこいつのせいか。
しかしこの虫、何か妙にデカイな）
そう、２０メートルほどの自分にとって虫ほどの大きさなのだ。
大体2～3メートルほどの大きさだろう。
こんなでかい虫は、赤道直下の国にもいないだろう。
ましてや、此処の気温は低い。

北の地方なのか、毎朝霜が降りているほどだ。
そんな場所にこんなでかい虫が普通いるだろうか？いや、いないだろう。
それにこの虫どこかで見たことがあるような……？

するとこちらの視線に気づいたのか、その虫が顔を上げる。
『ギョロッ』
漫画ならそんな擬音が着きそうな感じでこちらを見上げている。
いや、睨んでいる？
そう、目玉があるのだ。
顔の真ん中に一つの大きな目玉がある。（◎）

しばらく声を失っていると、その虫は急に動き出し、
『オハヨウ、ゴザイマス、マザー』
と喋りかけてきた。

喋りかけてきた！？

そうだこいつ！　見たことあると思ったら、ソルジャーだ！
ソルジャーレギオンだ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まずはいったん落ち着こう。

今自分の目の前にいるのはソルジャーレギオンだ。
ソルジャーレギオンというのは、マザーレギオンが生み出す兵隊

アリのようなものだ。
おもに草体の世話や、草体やマザーの防衛を行っており、劇中では草体を破壊したガメラに群がり、それを撃退している。
マザーレギオンにとってある意味最強の武器でもある。
数こそが力、である。

そもそもこのレギオンという名前自体、ガメラを襲ったソルジャーレギオンの群れを見た自衛隊員により、「大勢」の意味から付けられたものだ。
そして、そのソルジャーレギオンが此処にいるということは、
『ご指示ヲ、マザー』
俺がマザーですか、そうですか。
何時の間にやら、1児の父（母？）になってしまいました。

第三話　「仲間が増えるよ。やったねレギオン」　『オイ、バカヤメロ』（後書

２０１１．７．２６　一部修正
２０１１年１０月６日
ヒゲのＧが共鳴し、月光蝶が発動。
＃＃この後書きは黒歴史として削除されました＃＃

第四話　サブタイって基本適当

～前回のあらすじ～
ある日起きたら1児の父になりますた。
オメデトー（「∇」ノノ”パチパチパチ！！

『ゴ指示ヲ、マザー。』
現実逃避もこれ位にしよう。
さてどうしましょう。

「えーと、君はさっきから何をしてたの？」
『先ホドカラ、コノ建物内ノ、食糧ヲ、1ケ所ニ、集メテ、オキマシタ。』
「あー、そうなの？わざわざありがとう。」
『イエ、マザーノ、役ニ立ツ、事ガ、我々ノ、生キル、意味ナノデ。』
「マザーちゃうわ！Σ（＞0＜）⊂
つーか我々って、君1人しかいないじゃない。」
やっぱり皆で1つ、みたいな感覚してるのかな？
『？』
こてんと首を（？）かしげている。

あれれぇ？　なぜか可愛く見えてきたYO…。
「俺も末期なのかねぇ。」
『？？』

「まあ、いいや。
ところで君のことは、何て呼べばいい？」
『マザーノ、オ好キナ、ヨウニ。』

それはそれで困るな。
一郎と呼ぶか？ちょっとありきたりか。
じゃあ一護？オレンジ色は何処にもないが…。
いっその事、太郎と呼ぶか？でも太郎はな～。
…。
「だからマザーちゃうわ！Σ（＞０＜）∩
……取り合えず、今は暫定的に１号と呼ぼう。
後でじっくり考えるから、それでどう？」
『１号。　マザーニ、貰ッタ、名前。　トテモ、気ニ入リ、マシタ。
』（◎）

「そうかい？　１号がそれでいいなら何も言わないけど…。」
『ハイ。　アリガトウ、ゴザイマス。』
……。
「あれ？　そう言えば俺の名前何だっけ？」
『マザー？』
「だからマザーちゃうわ！∩（＞０＜）∩
じゃなくて前世の名前が…。」
『何ノ事カハ、分カリマセンガ、マザーハ、マザー、デス。』
「…そっか。　そうだな。　気にしても始まらないし。
どっかで思い出すでしょう。」
暫くは気にしないようにしよう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それで、1号。　何してんの？」
『マザー、食糧、ドウゾ。』　（◎）
ズイっとシリコンを差し出してくる。
「え？　あ、ありがとう。」
『イエ。』（◎）

これは喜んでんの？
リアクションが今一分からん。
喋り方にも抑揚ないし、判断できん。

とりあえず、今はこの集めてくれた食糧頂きますか。
「1号も空海？」
『スデニ、吸収、シマシタ。』
「（，・ω・、）ショボーン」

～只今食事中～
……。

～食事終了～

『マタ、集メテ、キマシタ。』
「食えと？」（；・∀・）
（◎）コクッ

～又もや食事中～

……。
～食事終了～

（◎）グイッ
Σ（・ε・；）

～只今食（ｒｙ～
……。
～食事終（ｒｙ～

（◎）
Σ（゜∀゜；）
「まだあるの？」
『マダ、沢山、アリマス。』
……。

（ノ　゜Д゜）ノ　＝＝＝＝　┣━━┫

……。（◎）グイグイッ

ウワァァ━━━━。。（゜、Д、　゜）。。━━━━ン！！！！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「だからね、１日３食６時間置き。
これが１番いい食生活な訳よ！
って言うか、毎日同じ触感＆味だと流石にきついのよ！
元日本人としては！」
『早ク、大キクナッテ、モラウタメ。　仕方ナシ。』

「……。」

『……。』（◎）

「……今日はもう、寝ていい？」

『ドウゾ。』

しくしく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日

「おはよー。」（ρｗ－）

『オハヨウ、ゴザイマス、マザー。』

『オハヨウ、ゴザイマス、マザー。』

「だからマザーちゃうわ！∩（＞０＜）∩

…………。

……………。

あるぇ？？（・∀・）

増えとる！！」

2人目が居ました。

第四話　サブタイって基本適当（後書き）

２０１１年１０月６日
ひっくり返ったＸが共鳴したため月光（ｒｙ
＃＃この後書きは削除されました＃＃

第五話　個性は大事！（前書き）

祝！ＰＶ４０，０００アクセス　ユニーク７０００人越え！
皆さん、ありがとー！

第五話　個性は大事！

～前回のあらすじ～
「増えてるじゃねーか！！」

『ドウカ、シマシタカ？　マザー。』（◎）
『ドウカ、シマシタカ？　マザー。』（◎）
「ちょっと、はもってるはもってる。
テ有価、何時の間に増えた！？

そ、そーだ。1号。1号はどっちだ！」
混乱しつつ1号を呼ぶ。
『コチラデス。　マザー。』（◎）
「だから、マザーちゃうわ！（＞０＜）
上にいた方が1号か。
これは名前以前に、姿と口調が全く同じだから違いが分からん！
もっと個性を大事にしろ。」
『我々ニ、個性、トイウモノハ、必要アリマセン。』
『我々ニ、個性、トイウモノハ、必要アリマセン。』
「2人いっぺんに喋るなよ…。（；・∀・）
じゃあ1号、ちょっと静かにしといて。」
『ハイ。　ワカリ、マシタ。』

新しく増えたと思われるソルジャーに話しかける。
「君が新しい子かい？」
『ソウデス。』

「よし。じゃあ、君は語尾に？だぜ〃を付けなさい。
もっとも簡単な個性の付け方は、口調を変えることだ！」
『了解シマシタ、ダゼ。』
「喋るときに、～した、～です、の代わりに？だぜ〃をつけたまえ。
」
『了解、ダゼ。』
「それから、君の名前は2号だ。ＯＫ？」
『了解、ダゼ。』
「うん、それでよし。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それで、また今日も食い続けろと言うのかね？」
『ソレハ、マザーガ、決メルコトデス。』
『我々ハ、ソレニ従ウダケ、ダゼ。』
「なぜか断れない気がする…。
まあいいや。
ほれ、お前らもどうだ。」（（，・ω・、）∩＿且～～
『スデニ、吸収、シマシタ。』
『スデニ、吸収、シマタゼ。』
「いじめか、これ。
それと2号、日本語間違えとる…。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この日一日は、新たに加わった（産まれた？）2号を交えつつ、
食事したり（主に一人で）、個性について（一方的に）語り合った

りして過ごした。

……これ、いじめられてないよね？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　次の日。

例のごとく1人増えてますね。
名前はV3にしようかな。
（´ー`）ふふふ。

（◎）（ー）（◎）
それにしても何か違和感が…。
（◎）ジー　（ー）～zzZZ　（◎　）ジー

「寝とる！！？」Σ（゜Д゜）

…お前ら目、瞑れるんだな。

「ま、まあ、1号と2号はやることあるだろ。
そっちに行っていいよ。」
『ワカリマシタ。　アリガトウ、ゴザイマス。　マザー。』
『行ッテ、マイリマス、ダゼ。』

さて、この子を起こして話でもしようか。
ほれ、起きろ～。
ツンツン＞（―）
（つ―）ウーン
（◎）パチッ
？（◎ ）三（ ◎）？キョロキョロ

何かキョロキョロしてる。
（・ ―・）ジー

！（◎）
こちらがじっと見ていると、それに気付いたのかこちらを見上げてきた。
なんだかこの子は、他の2人とは少し反応が違うね。
でも、流石に3人目ともなればこちらも慣れてきたわけで…。
『ギャーーーー！！』

「悲鳴を上げられたぁ！！？」Σ（ °△ °；）！！

第五話　個性は大事！（後書き）

対談式あとがきは、仲間内からも評判が良くなかったので、前回で打ち切りです。
短いコーナーでした。

まだしばらくは、ＢＥＴＡも人類も出てきません。
色々と、頭の中では妄想が広がっているのに…。
妄想が…妄想が文に表せない…。

第六話　トアル少女ノ物語（前書き）

ドーゾ

第六話　トアル少女ノ物語

ここはどこだろう。　　分からない。

…そうだ、思い出した。
私は死んだんだ。

私の名前は弥生三月１７歳の女子高生だ。
家族はいない。父も母も私が１０歳の頃に死んでしまった。
兄弟も居ない。親戚も居なかったから、私はそれから施設で育った。
でもそこは、お世辞にも良い場所じゃなかった。

大人たちは何もしようとはしなかった。小さい子供が泣いていても、その子を泣きやませようともしなかった。まるでそこに存在しないかのように。
何時も煙草を吸って、ギャンブルに勤しんでいた。
流石に暴力は無かったけど、完全に放任していた。
まともに教育もしていないから、暴れ放題、散らかし放題。

私は父と母に厳しく躾けられていたので、大丈夫だったが…。
だから、私が小さい子たちの面倒を看ることになった。

私より歳上の人達は、１人を除いて皆施設を抜け出して遊んでいた。中にはそのまま帰ってこない人もいた。
我ながら、よくグレなかったと思う。

そして、私が15歳になった時、その施設から追い出された。
どうやら大人たちが借金の形にしていたようだ。

私たちは住む場所を無くした。
でも、何人かは遠くの施設が預かってくれることになった。今までいた所よりはましだろう。

これからどうしようかと悩んでいた時、声をかけられた。その人は、以前言った年上勢のなかで、唯一子供たちの面倒を見ていてくれた人だった。
その人は、2年ほど前に大学に通うため、施設を出ていった。でも、毎月手紙と少しだがお金を送ってくれていた。
その人が、私達に「行くとこ無いんなら家にきな。部屋だけは無駄にあるから。ただし、独り立ちできる歳になるまで、だがな。」と言ってくれました。

私は、高校に入学してからは、アルバイトをして近くの安いアパートを借りた。
「高校生になったし、あまり負担を掛けたくないから出ていく。」と私が言うと、「こいつ等が寂しがるから、なるべく近くに頼む。」と言われたので、そうしたのだ。
それでも、3日に1度は顔を出している。

ある日、その人が死んでしまった。
死因は聞いていないが、安らかな顔をしていた。
その人の遺言で、その人の遺産は私達全員に分けられた。
みんな悲しんだ。

それからしばらくして、車に轢かれそうになっていた知らない子供を助けて、代わりに轢かれてしまった。
あっさりと、死んでしまった。

そして今に至る。
どこまでも真っ白な空間が広がっている。
これが死後の世界なのだろうか？と私が考えていると。

【すまんかった！！】

目の前には土下座して謝っている、やや白く光るお爺さんがいた。
「一体なにを謝ってるんですか？」
【実はな、お嬢さんはまだ死ぬ時期じゃなかったのだ。】
「はあ？」

これは…、俗に言うテンプレというやつだろう。

【本当に、すまなかった！！】
「分かりましたから、もう顔をあげてください。」
【お、怒っておらんのか？】
「はい。とりあえず、何があったのか話してもらえますか？」

すると、そのお爺さんは嬉しそうに立ち上がった。

【おお、分かった。

まずは自己紹介だな。　わしは神補佐だ。】
「神補佐？神様ではないんですか？」
【いや、神だ。　最も偉い女神様の補佐をする、言わば副社長のようなものだ。】
「そうなんですか。
あっ、そうだ、私の名前は…。」
【いや、知っているから大丈夫だ。】
「そうですか。」

【それより、わしのミスによりお嬢さんを殺してしまったのだ。
本来ならば、後６０年は生きられたのだが…、すまん。】
「もういいですよ。それより、私はこの後どうなるんでしょう？
天国とか地獄とか、そんな感じの所に送られるんですか？」
【それが、無理なのだ。天界の連中は石頭でな、予定にない行動以外を執ろうとせん。
だから、後６０年待ってもらわねばならんのだ。】

「そんなに…。」
【だから、代わりと言っては何だが、女神が管理する世界に転生してもらおうと思っている。
最低でも６０年、その世界で２度目の人生を生きてみんか？】
　何だかお約束な感じですね…。
　でも、ありがたいです。
「もう１度、生きてみたいです…。」
【そうか。分かった。
それと、お約束ついでに何か願いをかなえよう。　なにがいい？】
「それなら、残してきたあの子たちを幸せにしてあげて下さい。
きっと私が居なくなって悲しんでいると思うので。」
【分かった。わしが全力でその願い、かなえてみせよう！】
「ありがとうございます。

あっ、そう言えば、私はどんなところに転生するんですか？」
【それは、転生する世界のことか？それとも家族のことか？】
「両方教えてもらえますか？」
【分かった。
と言いたいところなんだが……その世界については、わしはよく知らないのだ。
なんせ、あの女神の管轄世界だからな。】
「そう…なんですか。」
知らない世界…少し不安になる。
【あと、お嬢さんが転生するのは人ではない。
これも女神の管轄生物だ。】
それを聞いて茫然としてしまう。

人じゃない何かになってしまうなんて…。
【本当にすまんな。わしにもっと力があればよかったんだが…。
神補佐ではできることがあまりにも少なくてな…。】
申し訳なさそうに、神様は顔を伏せる。
「いえ、大丈夫です。産まれてすぐ死んでしまう、何て事は無いんですよね？」
【それについては大丈夫だ。
その生物は人間よりはるかに強い！
それに、人間を襲って食べるなんてこともしないはずだからな。】
それなら大丈夫かな…。
「そうですか。少し安心しました。」
【うむ。では行ってきたまえ。】
「はい。行ってきます。」
そう言うと、私は意識を失った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

～Ｓｉｄｅ：神補佐～

【行ったか。】

すまないことをしてしまった。

【おいっ、おわったか？】

【これは女神様。　たった今行ったところです。】

【そうか。　それにしても、これは始末書ではすまないぞ。】

【分かっています。　今回のミスはわしの責任。　この首で済むなら安いものです。】

この仕事にミスは許されない。おそらくわしは消されるだろう。

【ふっ。

それについては大丈夫だ。　我が上にかけ合っておいた。

お前の管理りょーいきを減らす、ということで片がついたぞ。】

なんと…。

【女神様にはご迷惑をおかけしました。】

【お前にはむかしから世話になっているからな。　これくらい、なんてことないさ。

これからも我を支えてくれ。】

【本当にありがとうございます。】

願わくば、あの子が幸せでありますように。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

～Ｓｉｄｅ：三月～

「ツンツン」
誰かが私をつついている。
（こんな悪戯をするのはあの子たちかな？）
そう思って目を開ける。
（此処、何処！？）
見たことの無い工場のような場所だった。
辺りを見回していると、頭上から視線を感じる。
何かと思い顔を上げると…。

巨大な怪物と目があった

「ギャーーー！！」
我ながら変な悲鳴をあげてしまった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第六話　トアル少女ノ物語（後書き）

多くの感想で予想された通り、３人目は転生者です。

しかし、ＪＫ（女子高生）がソルジャーレギオンに…。

（＊´д｀＊）イイネソレ　・・・ハァハァ

＜オマワリサン、コッチデス。

な、何だお前らは！うわ、なにをする馬鹿やめ…

＜その後作者の姿を見たものは居ない＞

第七話　家族っていいね、何か。（前書き）

（＊，ロ，＊）イイネコレ　・・・　ハァハァ

第七話ドーゾ

第七話　家族っていいね、何か。

～Ｓｉｄｅ：三月～

今私の目の前にとても大きな怪獣がいる。
私は悲鳴を上げて工場の隅っこまで逃げてしまった。
（何でこんな怪獣がいるの！？
何なの、何で私こんな処にいるの！？）
訳がわからない。
（何！？　何がどうなってるの！？）
自分の体に違和感を感じ、近くにあった金属板を覗き込む。
（！！？）
映っていたのは化け物だった。
虫のような体、顔にある大きな１つ目、槍のように鋭い手足。
（人じゃない！！）

その瞬間、神様に言われたことを思い出した。
（そうだ、私転生したんだ。
それに、新しい体は人じゃないって神様は言っていたけど…。
それじゃあ、こんな虫みたいなのが新しい私！？）
目の前が真っ暗になった気がした。
こんな体では、本も読めないし、以前のように買い物に行くこともできないだろう。
もう誰かと話をすることもできないのだろう。
そう考えると、とても悲しくなってきた。
（ダメよ私！　弱気になっちゃ。
この新しい体で生きていかないといけないんだから。
絶望したって…何の意味もないもの。）

そこでふと気づいて先ほどの怪獣を見る。
別に襲ってくるわけでもなく、ただこちらをじっと見ている。
それを見て、
（まるで蟹みたい…。）
そう思ってしまった。
白銀色の硬そうな殻で体中を覆っている。
そしてその目は、青く優しい色で光っている。

暫く観察していると、
「何事デスカ、マザー。」と声が聞こえてきた。
その声がした方向をみると、工場の出入り口のような所から、私と同じ姿をした生き物が入ってきた。
「大キナ、音ガ、シマシタガ、何カ、アリマシタカ？」
そう怪獣に向かって話しかけているようだ。
……
……
……マザー！？
ということは、あれが私の新しい母なんですか！？
（何だか凄く似てない親子…。）
そう思ってしまった。

どうやら、話が終わったようなので、こちらから話しかけてみよう。
（でも、何て呼べば…。
やっぱりマザー？
でもそれだと何だか変な感じだし、やっぱりお母さんって呼んだほ方がいいかな？）

とりあえず話しかける。
「あっ、あの！」
こちらに気づいて振り向いた。
「あなたが私のお母様ですか？」
おそるおそる聞いてみた。
そして返事を待つ。

『ゴフッ！！』　バタッ

倒れた！？

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

マザーＳｉｄｅ
悲鳴を上げられた挙句に逃げられた…。
今は隅っこの方で怯えてる。
（何で！！どうして！？　何がいけなかった？
顔を近づけすぎたからか？
でも１号も２号もこんなこと無かったのに…。）
そんなことを考えていると、
『何事デスカ、マザー。』
１号がやってきた。
『大キナ、音ガ、シマシタガ、何カ、アリマシタカ？』
「おお、１号ちょっと助けてくれ。

何でか知らんがいきなり怯えられたんだが。
いったいどう言うことだ？
後ついでにマザーちゃうわ！Σ（＞０＜）ﾉ」
『ヨク、分カリマセン。』
「そうか。
まあ、３人目は個性云々言わなくて済みそうだが…。
そう言えば２号は？」
『食糧ヲ、運ンデ、イマス。』
「じゃあ、あと少ししたら朝食にするから。
また先に食べました、とか無しな。」
『了解シマシタ、マザー。』
「だから、マザーちゃ（以下略。」

『あっ、あの！』
ん？
３号（仮）が怯えから立ち直って、話しかけてきた。
『あなたが私のお母様ですか？』オソルオソル

「ゴフッ！！」　　バタッ
何と言うダメージ！
一撃で（心の）ライフポイントを半分持って行きやがった。
何なんだ、この心に渦巻く気持ちは…。
嬉しいような、でも何か大切な物を失ってしまうような…。
一々反応が可愛いんだよこの子は！
あのびくびくした様子がまるで子犬みたいで、つい苛めたくなってしまうような…。

ってちがーう！！
自分は断じてそんなアブノーマルではない！（変態紳士ではあるが…）
まさか…、これがわが子故の可愛さ、というものなのか……。

そんなあほなことを考えているうちに2号が帰ってきたので、何も無かったかの様に朝食をとる。

だが、3号（仮）は何か戸惑っているようだ…。
「どうした？何かあったか？」
『いえ、あの、これって…』
「ガラスだが…？」
『あの、いえ、そうじゃなくて…。』
「ん？　ああ！　はいこれ。」　（´・ω・`）―且<コトッ
『えーと、これは…。』
「ステンドグラスだよ。
きれいだろ？」
『え、えー…。』
何かすごく楽しい…、そして反応が可愛い…。
っていかんいかん。
「それを分解して中の珪素を吸うんだよ。」
『そ、そうなんですか。』
そう言うと、戸惑いながらも吸収し始めた。
（なんか……いいね！
でも、この子はおそらく……。）

～食事終了～
「じゃあ、1号2号は何時も通りね。
3号（仮）はちょっと話をしようか。」

『了解デス。マザー。』
『了解ダゼ。マザー。』
『はい…。分かりました。』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それで、何を話そうか。
君なら1号達みたいに個性について話し合う必要はなさそうだけど…。」
『あのっ。』
「何？」
『わ、私…、本当の意味であなたの子供じゃないんです。』
「どう言うことかな？」
『私は、昔人間だったんです。
昔と言うか、前世と言うか…、とにかくその頃の記憶を持ってるんです。
神様のミスで死んじゃって、それで転生させてもらって…。
でも、もう人じゃなくて。』
だんだん涙声になってきた。
…この体って泣けるンか？
『皆で朝ごはん食べたり…、お話したりしてたら、凄く楽しくて…。
でも…こんなんじゃダメで。
本当ならあなたの子供が居るはずなのに、私が入りこんじゃって。
だから…、私…。』
ポン。
『え？』
なでなで。
頭をなでてやる。
そして、優しく笑いかけながら（表情は変わらないけど。）言う。
「もういいよ。　分かったから。
何だか他の子とかなり性格が違うと思ったけど、そう言うことか。」

『はい…。』
「そんなこと、気にするな。
それから、君は親のことをあなた、なんて他人行儀な呼び方するのかい？」
『でも…、私にお母様なんて呼ぶ資格なんて…。』
「俺は嬉しかったけどな。
できればお父さんが良かったけど。」
『え？でも…。』
「そんなに自分を苦しめなさんなって。
せっかく2度目の人生貰ったんだろ？
じゃあ楽しまないと。
俺は君が生まれてきてくれて、本当に嬉しいんだけど？」
『でも…、私…。』
「ほら、君は今日生まれたんだよ。
そして、俺に初めて会った。
初めて会った人には、何て言うのかな？」
『は…、はじめまして。お母様／／／』
可愛いな～、これ。

※注、レギオンとソルジャーレギオンの会話です。その辺ご了承お願いします。

「よし、じゃあ君の名前を決めないとね。
昔は何て名前だった？」
『三月、弥生三月（やよいみつき）です。』
「三月ね。ちょうど3番目だしその名前で呼んでいいかな？」
『はい。』
「それじゃあ、1号と2号に名前報告しようか。」
『はい。お母様。』
うん、可愛い。

『あの、ところでお母様。』
「何？」
『お母様はひょっとして…。』
「多分三月が考えている通りだと思うよ。」
『やっぱり…。』
「さあ、行こうか。」
『はい。』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

え？どうやって頭なでたのかって？
実は、レギオンビュートを使ったんです。
レギオンビュートとは、ガメラ2終盤で角を折られたレギオンが使っていた、赤い触手です。
周りの電線を切断したり、ガメラに突き刺したりして使っていました。
そんな危ないこれですが、なんと力を弱めて使えば、酒瓶だって持てるんです。
これは、元からなのか、それとも幼女（と言う名の神様）の魔改造による成果なのか。
…おそらく後者だろう。
でもこれが結構便利なのだ。
今はまだ2本しか扱えないが、伸ばせば自分の体の2倍近く伸びるのだ。
めっちゃ便利。

さあ明日からもがんばっていこう。

第七話　家族っていいね、何か。（後書き）

危なくタイーホされてしまうところだった。
それにしても、いつ名間にかレギオンビュートが使えるようになっていましたね。
それも便利な腕代わり…。

まあ、いいんじゃなかろうか。

第八話　お引越しは０１２０－ｘｘｘ－ｘｘｘまで！（前書き）

最近朝起きるのがなぜか辛い。

朝投稿ができなくなるかも…。

第八話　お引越しは０１２０－ｘｘｘ－ｘｘｘまで！

～前回のあらすじ～
同郷の方との衝撃的な出会いがありました。

あれから２日ほど経った。

『マザー、食糧ガ、底ヲツキマシタ』

「え、もう？」

『別ノ街ヲ、探スベキダト、思イマス』

「そうか。
でも、近くに他の街があったっけ？」

『半径５０キロメートルノ、範囲デハ、アリマセン』

「そうか、５０キロ…５０キロメートル！？
何時の間にそんな遠くまで散策したの？
君ら走ったって時速５キロメートル位じゃなかったっけ？」

『問題、アリマセン。
ナゼナラ、空中ヲ、飛行シテ、回ッタカラ、デス』（◎）＜ドヤッ

「なぜかドヤ顔してるように見える不思議。
……って飛行！？

そうだ、忘れてた！
飛べるじゃん、俺ら！！　１号」

『ハイ』

「皆に引越しの準備するように言っといて」

『分カリマシタ』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「と言うことで、これから別の街に引っ越したいと思います」

『何処ニ、向カイマスカ？』

「とりあえず、南の方にでも行こうか。
ここら辺寒いし」

『ワカリマシタ』

「だから皆引越し準備しといて」

『あの、お母様』

「ん？何？
後一応言っておこう。母ちゃうわ∩（＞０＜）∩」

『どうやって移動するんですか？』

「（スルーか…。　三月、恐ろしい子！）」

「飛んで、だね」

『へ？』

「飛んで行くんだよ」

『と、飛べるんですか…？』

「皆飛べるはずだよ」

『今まで飛んだことなんて、無いですけど…』

「大丈夫。俺も初めてだから」（＊｀∇｀＊）＞エヘヘ

『（だ、大丈夫なのかな……）』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「よーし。皆準備できたね」

『準備ガ必要ナホド、物ハ無い、ダゼ』

「そうか。１号と三月は準備できた？」

『大丈夫デス』

『私も終わりました』

「よし。それじゃ、行こうか」

羽を伸ばす。

バサッ

と言うような羽ではなく、虫っぽい翅である。

3人も準備できたようだ。

「それじゃ、GO！」

大きく翅を羽ばたかせ、飛びあがる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

意外と初めてでもいけるようだ。

三月は少しふらふらしているが、1号と2号に、危ない時は助けるように言っておいたから、大丈夫だろう。

2時間ほど飛んだだろうか。

ちょうどよさそうな街を見つけた。

「そこの街に降りようか」

『了解』

ヒュウウウウウゥゥゥゥゥゥゥ　スタッ

「着地」

スタッ

スタッ

ポテッ

ん？だれか着地失敗した？

『い、痛い……』

「三月、大丈夫か？」

『だ、大丈夫です』

「そうか。
よし、じゃあ大きめの建物探そうか。
主に俺が入れるような……」

『了解ダゼ』

「これ、倉庫か？」

『ソノヨウデス』

「それじゃ、新居はここで決定。
早速食糧集めに行くぞ、１号」

『マザーハ、オトナシク、待ッテイテクダサイ』

「（，・ω・、）ショボーン」

『お母様、少し街を見て回っていいですか？』

「いいよ。いってらー」

『周囲ヲ、偵察シテ、クルゼ』ブーン

こうして新しい街での生活が始まった。

第八話　お引越しは０１２０－ｘｘｘ－ｘｘｘまで！（後書き）

２０１１．８．１０修正

第九話　やっぱり誰が見てるか分かったもんじゃない（前書き）

第九話目です。
ドーゾ。

第九話　やっぱり誰が見てるか分かったもんじゃない

～Ｓｉｄｅ：ソ連軍上層部～

薄暗い部屋の中、１０人ほどの男が集まり、モニターを見ている。
「では、これを御覧ください。」
一人の男が一枚の写真をモニターに映す。
「これは先日、我が軍の観測衛星の捉えた映像です。
この日は雲が多く、地上はほとんど映っておりませんが、雲の切れ目の中に妙な物が写り込んでいたのです。」
ピッ
そこには何かの影のようなものが写り込んでいた。
「何かねこれは？」
「只今拡大します。少々お待ち下さい。」

「これは？」
そこには飛行していると思しき何かの姿があった。
「先ほども申し上げましたが、これは昨日の１１：００時に撮影されたものです。
そしてこれは２０メートルほどの大きさの、飛行していると思われる何かの影です。」
「飛行？我が軍の輸送機ではないのかね？」
一人の男が不思議そうに口を開く。
「いえ、この空域はすでにＢＥＴＡによって支配されています。
我が軍に自殺しにゆくほど、酔狂なパイロットはおりません。
近くに街がありましたが、それも４日ほど前に全員避難済みです。」
「では何処の所属だ？
いくらＢＥＴＡによって立ち入れんとは言え、何の連絡も許可も無

しにソ連の領空を通過してよい訳がなかろう。
それとも自殺志願者かね？」
　別の男が笑みを浮かべながら言う。
「いえ、昨日からこの国の領空内に侵入した機は何処の基地も確認していません。」

「では一体何だというのかね。」
　また別の男が少しイラついた様子で話す。
「…。　今から画像処理を行います。
少々お待ちください。」
　拡大されぼやけた画像が奇麗に写ってゆく。
「こ、これは…。」

「はい。
おそらくですがこの物体の形状から、一月ほど前にユーリヤ・ノルシュテイン中尉によって確認された、ベールィストーノシカ（白ムカデ）であると思われます。」
　その映像には、飛行するレギオンの姿が写っていた。
「全長は２０メートルを超え、翅らしきものを使い、時速１５０キロメートルほどのスピードで飛行していますが、中尉に確認したので、ほぼ間違いないと思われます。」

「少し前に新種のＢＥＴＡだと騒がれていた奴か。
中尉が目撃した時は確か１０メートルほどだと聞いたが…。
一月足らずで２倍以上でかくなったということか。」

「だが何の問題がある？
あの化け物どものことだ。
飛行する程度の能力を持った奴が出てきても驚かん。
それに時速１５０キロでは、前大戦の複葉機にすら追いつけんでは

ないか。」
先ほどのイラついていた男が再びそう言った。
「確かに、その程度ならば問題はありません。
ですがこちらを見てください。」
再び男が操作する。
ピッ
そこには、レギオンの後ろに並んで飛行する、３つの小さな影があった。
「この３つの影は、前方のベールィストーノシカと比べると、２～３メートルほどの大きさで、同じく翅で飛行していると思われます。
この３匹は、前回は確認されておりませんでした。」
ドンッ！
「つまり何が言いたいのかね！」
男が机を叩き言った。
「…まだわからんのかね？」
奥に座り一言も発しなかった初老の男が静かに言った。
「どう言う意味だ！」
その発言に対し、男は怒りを見せる。
「こいつが監視中のハイヴの中から出てきたという報告は聞いていない。
そして前回は居なかった小型種のようなものが増えている。
つまりだ、こいつは繁殖している、ということだろう？」
そう静かに前に立つ男に言う。
「はい。
そう考えるのが妥当かと。」
「だからどう言う意味かと聞いている！！」
「…はぁ。
まだ分からんのか？
奴はハイヴを必要とせずにその数を増やせるかも知れんと言うことだ。

聞けばこいつは要撃級を一激で蒸発させるほどのレーザーを撃つと言うではないか。
１０メートルほどの大きさで重光線級を上回る力を持っているこいつが、繁殖を始めたのだぞ。
君は、飛行する光線級の群れを、どう対処すると言うのかね？」
ざわざわ。
ざわ…ざわ…。
「ただの仮説にすぎないがね。
それに、別の個体である可能性もある。」

「はい。
それに、今だＢＥＴＡの一種なのかすら不明です。
重光線級の射程に入っていても、攻撃されていないにもかかわらず、要撃級を撃ち殺したという不可解な行動を行っています。
本来ＢＥＴＡは見方に誤射を行いませんから。」

「では結局こいつは何なのだ！！」

「中尉がこれと遭遇した3日ほど前、１つの隕石が落下しました。
前線よりＢＥＴＡの領域内だったため、まともに調査を行うことができませんでしたが、調査を行った者たちによれば、確認した隕石の質量は落下の威力に対し、圧倒的に足りないそうです。
まるで、自ら移動したようだ…と。
それと、奇妙なことにその周辺の酸素濃度が2倍近くにまで上がっていたそうです。」

「こいつが宇宙（そら）から来たというのは間違いなさそうだな。」

「そ、それでこいつの消息は？」

「残念ながら、その後は再び雲に隠れてしまったために不明です。」
「……。
近いうちに、こいつに対する調査を行わねばならんだろうな…。」
部屋の中を沈黙が支配してゆく。
こうして、白ムカデに対しての調査が行われることとなった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

～Ｓｉｄｅ：マザー～

「へっくし！」
『風邪ですか？お母様。』
「風邪はひかないと思うけどな、この体。
多分誰かが噂してるんでしょう。
（くしゃみできるのか、この体…。）
それより、その持ってるのは何？」
『これですか？
絵本のようなものがあったので、少しお借りしようかと思って。』
「そっか。
読み終わったらちゃんと元あった所に返しとくんだよ～。」
『はい。』ニコニコ
『マザー、周囲ニ、異常無シ、ダゼ。』
「おう。
じゃ、１号呼んで飯にしようか。」

主人公たちは平和であった。

第九話　やっぱり誰が見てるか分かったもんじゃない（後書き）

実は衛星から見られていた主人公達。
そろそろ主人公に人類からのアプローチがありそう。

草体はどのタイミングで出そうか…。

１１・０７・１０一部修正

第十話　一家の日常（前書き）

風邪で調子悪いヨ～。

第十話　一家の日常

～前回のあらすじ～
誰か噂した？

引越しから2日経った。
この2日で新しく増えた家族を紹介しよう。
「4号、コロ介、カモーン。」
『ハイ、何デゴンス？』（◎）
『何カ御用ナリカ？』（◎）

な、何か言いたいことでもありそうだな！
……
……
……
仕方なかった。
1号2号と個性が薄い2人に比べ、（レギオンとして）個性的すぎる三月があまりにも濃かったのだ。
だから4号が産まれた際、あまりにもその会話が淡白過ぎたのだ。
ついだ。
つい言ってしまった。
「君は語尾にゴンスを付けたまえ。」
『ハイ、了解デ、ゴンス。』

そして、それと同じ感覚で5人目に、
「君は語尾にナリを付けんしゃい。」

と言い、
『了解ナリ。』
となってしまったのだ。
語尾にナリ付けるとあのロボットにしか思えなくて…。
名前が…。
反省はしている、後悔はしていない。

『マザー？』
『マザー、何ノ用、ナリカ？』
「ああ、ごめんごめん。
ちょっと呼んだだけだから。」
『了解デゴンス。』
『了解ナリ。』

やっぱり違和感しかない…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

～Ｓｉｄｅ：三月～

新しい街に引っ越してから2日経ちました。
その間に、新しい兄弟が産まれました。
２人の名前は４号とコロ介です。
でも口調が少し個性的です。
４号はゴンスって語尾につけますし、コロ介はナリって付けます。
でも、口調は個性的ですが性格はお兄様達と同じだと思います。
あ、ですが、１号お兄様は最近表情が柔らかくなっていて、初めて話した時より笑って話すことが多くなりました。
それをお母様に話したら、何だかお母様も嬉しそうでした。

最近私はよく本を読んでいます。
この街には小さいですが図書館がありました。
誰かが持って行ってしまったのか、ほとんど残っていませんでしたが、絵本などがいくつか残っていました。
ほかにも何冊か分厚い本があったのですが、知らない文字で書かれていて読めませんでした。
英語じゃないようなので、ドイツ語かな？フランス語かな？　よくわかりません。
でも、絵本なら字も少ないですし、文字を覚える練習にもなります。

あっ、そう言えば説明忘れていました。
どうやって本を読んでいるのか、です。
実は、紐のようなものを出すことができるんです。
レギオンビュート、というものなのだそうです。
お母様は力を抜いて使わないと鉄でも切ってしまうそうですが、私ではどんなに頑張っても細い草１本しか切ることができません。
でもその代わり、このレギオンビュートを１０本出すことができるので、これを５本ずつ縒り集めて手のようにして使っています。
結構便利です。
それをお母様に話したら、少し落ち込んでしまいました。
どうしてでしょうか？
『三月、飛行ノ訓練ヲ、スルゼ。』
そうそう。
私は、飛ぶのが下手だったので、２号お兄様にお願いして教えてもらうことにしました。
今日もこれから練習です。
「はい。

今行きます。」

今日も家族は平和です

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第十話　一家の日常（後書き）

こんな感じの話でいいんかね～？
一応これ、あいとゆうきのおとぎばなしなんだが…。

レギオン一家の中では三月が一番器用という設定です。
主人公は頑張っても３本ほどしかビュート使えません。
１号４本
２号２本
４号１本
コロ介まだ使えず
ただ、ソルジャーの使うビュートは威力は低く、専ら何かを掴んだり引き寄せたりすることに使われます。

第十一話　日常の崩壊（前書き）

何か大切なものを失くしちまった。
そんな気がするぜ。

財布落とした（／□≦≡、）エーン！！

第十一話　日常の崩壊

〜前回のあらすじ〜
おもに日常。

えー、皆さんいきなりですが、本当にいきなりですが……
人間になりました。
はい、そうです。
ある日朝起きたら手が着いていました。
足が2本でした。
後ろを振り向けるようになりました。

いったい何なんですかこれは！
自分妖怪人間じゃないですよ！
人間になりたーい！なんて言ったこと無いですよ！！
もちろん7つ揃えれば願いがかなうボールなんて集めてませんよ。

もうね、気分はまさに
，．　　―-'-'-'-'””””‥‥、
（．　　，，，，．．　―ァァフ―　　あ…あ
りのまま　今　起こった事を話すぜ！
―ｉ　ｉ―　　〜！〜〜　／／―
―ｌ、〜　ｊ〜　／，，ィ／／―　『おれ
は昨日までレギオンだったと
ｉ―‥！ゞ、―ノ／　ｕ　〜‥〜／／へ　思っ
たらいつのまにか人間になっていた』
―リ　ｕ'〜　，ノ　―，！Ｖ，ハ　―
／ｆト、―〜ル〜，ィ'ｅラ　，　タ人　な…何

を言ってるのかわからねーと思うが
おれも何をされたのかわからなかった…
頭がどうにかなりそうだった…
催眠術だとか幻覚だとか
そんなチャチなもんじゃあ
断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

状態である。（決して文字数稼ぎではない！）

まあ実際そこまで驚いてませんけどね。
神様（ようじょ）の魔改造のせいでレギオン的におかしいことが沢山」ありましたから。
……。
つーかさ、もうこれ魔改造レギオンじゃなくて、レギオンの特徴を持った何か、だよね…。
「ふう。全くどうしたものか…。」

「大変ですお母様！　私起きたら人間になってました！」

慌ただしく三月がやってきた。

「お母様―！

あれ？　どちら様ですか？」

どうやら三月も人間化しているようだ。

「俺だよ」

「お母様ですか！」ビックリ

かなり驚いている。

しかし、人間モードの三月はかわいいな～。

見た目は１０歳くらい。

髪は黒髪。

長さは肩よりやや下くらいで顔は可愛らしい。

うん。とてもいい幼女だ！

「お、お母様」

「ん？　どうした？」

「お母様、凄くきれいです／／／」

「へ？」

今とんでもない言葉が聞こえた気がしたが…。

「そ、そーだ。

1号達はなにしてる？」

現実逃避をしよう。

「あ、そうだ。
お母様、ちょっとこちらに来てください」

「え？　あ、ちょっ……」

あっという間に三月に引っ張られてしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「なるほど。

誰だこいつら…」

全員人間化しとるがな…。

「んで、お前は誰だ？」

「私です、マザー」

「1号か」

1号の見た目は何と言うか、某テニス部の部長！といった感じだ。
髪は三月と同じ黒色。
体つきは中肉中背で、少々目つきが鋭い。
正直眼鏡が似合いそうだ。（あとイケ面だ）

「お前は何となく分かる、２号だろ？」

「そうダゼ」

２号は、見た感じどこかの不良少年といった感じかな。
髪は茶色で、体系はややほっそりとしている。
まあ、こいつもイケ面の類だろう。
ちっ。

「見た目結構ごついな。
誰だ？」

「４号でゴンス」

なんつーか、北斗の拳に出てきそうな感じだ。
デカイ、ゴツイ。
身長２ｍあるんじゃなかろうか。
髪は金色。それが１番驚いたが…。

「あれ？コロ介…お前…」

「何ナリか？」

「男？女？」

「……」
見た目中性的。
髪は赤みがかった茶色で短髪。
華奢な体系である。

「なんだかな～」

「お母様」

「ん？何か…」

三月が目を輝かせて鏡を持っている。

どこから持ってきたの、それ。

「み、三月。その鏡はなんだい？」

「どうぞ」

なぜニコニコしながら鏡をこっちに向ける。

「……。

み、見ろと？」

「はい！」コクコク

ずいぶんと元気よくうなずくね。

……

……

……

「誰だよ…」

白銀の髪、白い肌、青い目。

１７０ｃｍほどの身長。

明らかに美系と言えるであろう人物が、俺と同じ動きをしている。

そして胸がある。

そして胸がある…。

大事なことなので2回言いました。

これは、ひょっとして。

いや、ひょっとしなくても女になってはいないか？

「なぁぜぇだぁー！！」

心からの叫びであった。

第十一話　日常の崩壊（後書き）

大分崩れてきたな。

まあ、後２、３話でシリアスに入る予定なんでこのくらい崩してもいいかな…。

２０１１．１０．２６修正

第十二話　平穏な時間（前書き）

風邪でダウンしておりました。

それでは１２話ドーゾ。

第十二話　平穏な時間

～前回のあらすじ～
どうしてこうなった。（；゜。д゜）　……

ま、大体そんなことじゃないかと思っていましたがね…。
いつまでも気にしては居られない。今は、自分が街を自由に歩き回れるようになったことを、素直に喜ぼう。
レギオンの状態では入ることができなかった建物の中や、路地裏など様々な所にいけるようになったのだ。
ポジティブに行こうではないか。

歩き回っていた時に気付いたのだが、このヒューマンボディー、少しスペックがおかしいのではなかろうか？
軽くジャンプしただけで建物の屋根に登れたのだが…。
（ちょっとおかしいよな）
そう思い近くに落ちていた石を拾い、力を込める。
ビキッ、と音を立てて石が砕けた…。

「……」バゴッ
黙って壁を殴ったら壁に穴が開いた…。

「……」ベキッ
鉄柱を蹴ったら鉄柱が折れ曲った…。

「……」フンッ
近くにあった重たそうな岩が軽々と持ち上がった。

「どういうことなの……」（（（（（；゜Д゜））））ガクガクブルブル

一体何なんだ、このボディー。ハイスペックすぎるだろ…。
おまけに殴った手足は少し傷が付いている程度。

「……何このチートボディー。
人間状態ですら魔改造してたのか。あの神様（ようじょ）何考えてんだ？」

ま、気にしてもどうにもならないし、三月が最近よく行く図書館にでも行ってみますか。

「三月―、いるかーい？」

「はーい、なんですか？」

どうやら今日も本を読みに来ていたようだ。奥の方から声が聞こえる。

「いや、ただ普段三月がどう過ごしているのか不思議に思ってさ」

「そうですか」

ふと周りを見てあることに気づく。
「なんか本棚がスカスカだな」
「はい、そうなんです。
誰かが持って行ってしまったんでしょうか」
「そうだね。
多分この街の人が、街から出て行くときに持ちだしたんだろうね」
「どうして出て行ってしまったのでしょうか」
「近くで戦争でもあったのかもね。前居た街は壊れた建物が沢山あったし。多分この近くで戦争でも起きたんじゃないかな。
だから皆何処かへ避難したんだろう」
「避難、ですか」
「うん。ほとんどの家は食糧や服が無かったから、多分避難したんだろう」
「何だか寂しいです」
「そうだね。
そう言えば三月が読んでる本は残ってた奴かい？」
「はい。奥の方に何冊か残っていたんです。
お母様も読んでみませんか？」
嬉しそうに三月がそう話しかけてくる。
「そうだね。久しぶりに読書もいいかもね。

どれか適当に見つくろってくれるかい？」

「はい」

三月が奥へ走っていく。

その間建物のなかを眺めていると、本棚の上に1冊の本が置いてあった。

手にとって見てみると、

（これは…、地図帳か？）

どうやら地図帳のようだ。

少しすると三月が本を持ってやって来た。三月が持ってきたのは数冊の絵本だった。

「お母様、お気に入りの場所があるんです。

そこで読みませんか？」

そう聞いてくる。特に用事は無いのでいいだろう。

「ああ、いいよ」

三月についていくと、そこは小さな公園にあるベンチだった。

「ここは日当たりが良くて、とっても気持ちがいいんです」

「へー、公園か」

ベンチに座り、三月に渡された絵本を読む。

「これは…ロシア語かな？」

「ロシア語なんですか？」
「多分ね。昔ほんの少し勉強しただけで、ほとんど知らないけど」
「ロシア語だったんですか。私ずっとドイツ語か何かだと思ってました」
「まあ、知らないと分からないし、仕方ないよ」
すると三月が俺の持つ本に気付いた。
「お母様が持っているその本は何ですか？」
「ん？　ああ。忘れるところだった」
「これは…地図ですか？」
「うん。棚の上に置いてあったんだよ。
そのせいで持ちだされなかったんだろうね」
「何が載ってるんですか？」
「これからそれを確認するところさ」
地図を開く。
「なんですか、これ？」
「これはこの国とその周辺が書いてある地図だね。

えーと国名は…サユース・サヴィェーツキフ・サツィアリスチーチェスキフ・リスプーブリク……」

「それって何処の国ですか？」

「これはソビエト連邦、つまりソ連のことだね」

「ソ連ってロシアの昔の名前ですよね？」

「そう、第一次世界大戦終了後に樹立された、世界初の社会主義国家だね」

「ということは、ここはソ連なんでしょうか？」

「多分ね。
だから、ずっと東に行けば日本もあるだろうね」

「日本ですか」

「ああ」

「……」

三月が少し悲しそうな顔をする。
もしかしたら前世のことを思い出しているのかもしれない。

「まだ分かんないけどね。
そうだ！　そのうち皆で日本に行こうか。
京都や奈良なんかを観光して、ついでに何か美味しいものでも食べて、ね」

「はい！」（＊^▽^＊）ニパッ♪

「そう言えばこの体って、普通のご飯食べられるんでしょうか？」

「さあ。もし無理でも、その時は観光だけすればいいでしょう」

「そうですね」

「三月は京都、行ったことあるかい？」

「いえ。ないです」

「そっか。
じゃあ是非1度は見に行かないとね。
金閣寺や銀閣寺、それに比叡山とか。
色々見るところがあるから、絶対に1号達を連れて行こう。
もちろん三月もね」

「はい！」

そうして読書や話をするうちに、いつの間にか三月は寝てしまった。
膝の上に頭を乗せてすやすやと気持ちよさそうだ。
（こういうのも、たまにはいいか）
三月の頭をなでながら、温かな日差しの中で旅行の計画を考えているうちに、自分も何時しか眠ってしまった。

第十二話　平穏な時間（後書き）

財布無事発見しましたー。
拾って届けてくれた方に感謝です。

関係ないことですいません。
２０１１．８．１０修正

第十三話　一方その頃（前書き）

１３話目…時間が…かかったヨ…。

ドーズ。

第十三話　一方その頃

「隊長聞きましたか。
なんでも、ベールィストーノシカの調査隊が組織されるそうですよ」

声を弾ませながらニコライが、その後ろにイワンが付いてやってくる。

「ああ、聞いている」

「隊長は志願しないんですかい？」

「人員については上が選ぶ。私が口を出せることではない」

確かに私もできることなら参加させてもらいたい。
だが、我々には守るべき場所がある。そう易々と此処を離れる訳にはいかない。

「俺は見てみたいですけどねぇ。ＢＥＴＡの亜種って奴を」

「ＢＥＴＡの反逆組だった、ってやつか？　ただの噂だろ。
そもそもＢＥＴＡかどうかすら分かってないだろ？」

「最近じゃ、数を増やしたなんてのもあるぜ。なんでも繁殖してるとか…」

そう。最近はそんな噂話が絶えない。ＢＥＴＡと敵対している生物だとか何処かの国が造り出した生物兵器だとか…。今ニコライが言ったように、ＢＥＴＡの亜種と言う噂もその１つだ。

「お前らは噂話が好きだな」

「仕方がないですよ。こう言う話は皆気になるものですし」

「隊長は何か聞いてないんですかい？　上の連中から色々話があったって聞きましたが」

「残念だが、目新しい情報はなかった。幾つか確認があっただけにすぎん。
大体そんな情報が1尉官に知らされる訳がないだろう」

「第一発見者に対しても厳しいんですねぇ」

「まあ、初めて姿を確認したというだけだからな。特別扱いする理由にはならんさ」

だが、口惜しいものだな。せっかくまた会えるチャンスかもしれんと言うのに。

「中尉殿、ここにいましたか」

すると、1人の兵士がやって来た。

「何だ。何か用か？」

「はい。基地司令がお呼びです。後ろのお二人も」

「基地司令が？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「司令、ユーリヤ・ノルシュテイン中尉およびその部下二名、只今参りました」

「うむ。まずは楽にしたまえ。早速で悪いが、本題に入らせてもらおう。
ベールィストーノシカの調査隊が組織されると言う話を君たちも聞いているだろう？」

「はい。噂程度ですが聞き及んでおります」

「なら話が早い。君達三人にはその調査隊への転属命令が出ている」

「なっ！　ですが司令、我々にはこの基地の防衛の任務が…」

「問題ない。じきに本部から増員がこちらに届く」

「…」

「心配するな。今すぐにＢＥＴＡ共がこの基地を落としに来る訳ではない。…。
今、人類は危機に瀕している。それこそ藁にでも縋りたいくらいにな。
君たちの新たな任務は重要だ。うまくいけば人類は新たな仲間を作ることができるかもしれんからな。君たちは期待されていると言っても過言ではない。
奴について少しでも情報を持ち帰ってもらいたい」

「はっ！　了解しました」

「無茶な任務ばかりですまないな…。
それと、本日付で君は大尉に昇格だ。後ろの二人も一階級昇進だ」

「「はっ！　有難う御座います！」」

「では、頑張ってくれ。幸運を祈る」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「驚いたな。まさか私が宛がわれるとは…」

「良かったじゃないですか隊長。これで俺もあいつを見ることができます」

「全く、気楽だなニコライ」

「そう言うお前も顔が笑ってるぞ。嬉しいなら素直に嬉しいって言いやがれ」

「二人とも落ち着け。　各自渡された資料に目を通しておけよ。
それと長い旅になりそうだからな、その準備もしておけ。

楽しくなりそうだ」

「「了解です！」」

しかし、この資料にあるリーディング能力者とは一体…。
まあ、まずは奴をどうやって見つけるかが先だな。

「必ず見つけてやるぞ、ベールィストーノシカ。あの時の礼は言いたいからな」

第十三話　一方その頃（後書き）

じ、時間がかかった割に…短い…。

２０１１．７．２９一部修正。

第十四話　（前書き）

１４話です。
ドーゾ。

第十四話

「マザー。起きてくださいマザー」

1号の声がする。

「ん～。なんだ？」

「もうすぐ日が暮れます。
風も冷たくなってきましたし、そろそろ戻りましょう」

どうやらいつの間にか眠っていたようだ。もう空は赤くなっている。

「ああ、わかった。
おーい、三月。起きろ～」

膝の上に頭を置いて眠っている三月を起こす。

「う～。おはようございまふ」（つ＿｜＊）。ｏＯ

鼻血が出そうだ…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あれ？　1号どうしたの？　その眼鏡」

1号の顔には、イメージぴったりの眼鏡がかかっていた。

「民家の中にあったのを見つけました。
マザーが以前、これが似合うと言っていたのを思い出してかけてみました。
いかがでしょうか？」

言いましたね、前に。眼鏡が似合いそうとか。
でも、眼鏡かけるとホントにあのテニス部の部長だね。
「油断せずに行こう」とか言いそうだね。

「よく似合ってるじゃん。
それって伊達？　それとも度入ってる？」

「伊達です」

「お兄様カッコいいです」

「ありがとう、三月」

この兄妹、何気によく会話してるんだよね。
1号もかなり表現が豊かになった。人間モードになってからかな、ここまで性格がはっきり出るようになったのは。

「それで、皆は？」

「皆あの家に集まっています」

家？　あの拠点にした場所か。
いや、あれは家と言うより工場だから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「えー、皆に言っておきたいことがありま～す」

全員がこちらを向く。

「今我々が居るこの国がソ連だということが分かりました。
東に行けば日本があるはずです。
だから、少ししたら日本へ観光に行きたいと思います！」

「理由になってないゼ」Σ（゜△゜；）

気にするな2号。

「行くなら、先ず何処から見て行きますか？」

流石1号、わかってるね。

「先ず首都東京に。
その後京都大阪奈良と修学旅行お決まりのコースを行き、南下。
九州へ、といった感じで」

「東北へは行かないんですか？」

「ほう、三月は東北行きたいか。
でも、ちょっと寒い地方は勘弁。
温かい海が見てみたい」

「足はどうするでゴンス？」

「飛ぶか、掘るか。

手っ取り早いのは飛ぶこと。
この体ならうまく電磁波吸収してステルス能力にできるんじゃなかろうかと期待している。
掘るなら1カ月以上掛かる。絶対！」

正直海泳げるか分からんしね、この体。
泳げなかったら最悪。

「他に質問は？
ないなら、これから人間モードの時の名前を決めたいと思います」

皆不思議そうな顔をしている。

「なぜでゴンス？」

「観光先で、1号2号って番号で呼んでたら変に思われるからね。
なるべく怪しまれたくないし」

「それじゃあ、どんな名前にするんですか？」

「そ～だね。じゃあ、先ず1号を…アインとかじゃあんま変わらないしな…。
1、一、かず……一樹（カズキ）なんてどうよ？
長男だし一って漢字入ってるし」

「いいと思います」

結構嬉しそうだね。

「俺はどういう名前になるんダ？」

「2号は……。
信二(シンジ)でいいよな」
「いいゼ」
「三月は…そのままでいい？」
「はい」
「えーと、4号は…（なぜかアームストロングとか付けたくなるな…）
金髪だしアレックスとか」
「（・ω・）bグッ」
気に入ったっぽいな。
「コロ介はそのままでいいよな」
「別にかまわないナリ」
「マザーは何と名乗るのですか？」
1号が聞いてきた。
そう言えば自分の名前とか忘れたままだったな。
「う～ん、そうだな～。
…
零(レイ)とかどう思う？」

「いいと思います」

「お母様、もう少し可愛らしい名前でもいいのでは？」

「えっ！？　いや流石に可愛らしい名前とかは勘弁」

「（，・ω・、）ショボーン
そうだ、名字はどうしますか？」

「名字とか考えて無かったな…。
鋭田？」

「いいと思います」

「1号、じゃなかった一樹。
君さっきからそれしか言ってなくない？」

「マザーの気のせいです」

「気のせいか…？
あ、今のでもう一つ思い出した。
マザーって呼ぶの、人間モードでは禁止な。
それ以外の呼び方にしなさい。
父上とか親父とか。」

「それでは自分は母上と呼ばせていただきます」

「俺はオフクロって呼ぶゼ」

「我輩も母上と呼ばせていただくでゴンス」

アレックス…お前の1人称我輩だったんだな。
初めて聞いたよ。
つーかお前ら、わざとか…。

「コロ介お前は？」

「マミィで…」

「独特だな。いいぞ」

「それよりマミィ」

「なんだ？」

「観光行くのはいいけど、お金あるナリか？」

……

……

……「あ！？」

第十四話　（後書き）

主人公の名前使わせてもらいました。
案をくれたマサトさん、少し変えましたがどうも有難うございます。
２０１１．７．１９主人公の名前修正
ついさっきアクセス解析見てみたら、ＰＶ２０万越えしとりました
…。
（（（；゜Д゜））） ガクブルガクブル
嬉しいやら、恐ろしいやら。
ありがとうございます。

第十五話（前書き）

１５話です。
ドーゾ。

第十五話

～前回のあらすじ～
家族で日本へ旅行に行こう。
でも金がなかった。ｏｒｚ

衝撃の文無し宣言から3日経った。
ソルジャーは１０人に増えていた。
わけがわからないよ（，・ω・、）

ちなみに名前は６～１０号
まだ人間モードにはなれないようなので、もう一つの名前はない。
口調は特に決めていない。
だがこいつら、意外なことに初めっから個性があった。

まず６号。
この子は基本無口。話しかけても首を縦か横に振るだけだ。初期の１号より喋らない。１人称は私。

次に７号。
この子はよく動き回る。兎に角うろちょろしとる。まあ、活発なのはいいことだ。１人称は僕。

そして８、９、１０号。
この子等は三つ子だ。常に３人で行動している。喋るときも基本３人で喋る。息ぴったり過ぎて少しビビった。１人称は自分の名前。

ここまで個性豊かだと転生者なんじゃないかと疑い、さりげなく探りを入れてみたが、

――「ぬるぽ」　『『……』』シ～ン　（あれ？）――

とか

――「やったねレギオン。仲間が増えるよ」　『オイ、ヤメロゼ』

Σ（なぜ2号が！？）――

とか

――「ここは俺に任せろ。ばりばり」　『『『……』』』　「……」

「や、やめて」　Σ「なぜ三月がそれを！」　「えっと、信二お兄様に教えてもらいました」　（あ・い・つ・か）――

と、全く反応がなかった。

多分違うのだろう。

あ、2号、後で少しお話しようか？

『＼（＾o＾）／』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃあ、ちょっと遠くまで飛んでくるから、留守番頼んだよー」

『了解デス』

「いってらっしゃい。お母様」

「　変　身　！」ピカー（発光）

レギオンの姿に戻り、翅を出す。そして勢いよく飛びあがり、

「2日したら帰ってくるから。お土産も何か用意しとくねー」
と言って、そのまま南へ向けて飛んでゆく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回の旅の目的は、旅行に必要な路銀を稼ぐため金になりそうな物を見つけること。
皆で話し合った結果、俺が金になりそうな物を集めて、残りはこの街で使えそうな物を探すということになった。

あとおまけとして草体を育てるのに良さそうな場所を探すことにもなった。
そろそろ本能が訴えかけてくるのだよ。
『草体飛ばそうぜ』ってさ。
南を目指す理由は、温かい方が草体の成長速度が速いから。なるべく手間はかからない方がいい。

「しかし、音速で飛ぶってのは初めての経験だな。世界が変わって見えるね」

只今マッハ1で飛行中。こんな翅で音速で飛べるのだから我ながら不思議な生物だと思う。

人間じゃできないことを平然とやってのけるこの体。そこに痺れる憧れるぅ！

「空は晴天、風は無し。気分も最高。まさに飛行日和！

フハハハハハ！　素晴らしい！　実に素晴らしいー！」

こんなにテンションが上がるとは思わなかった。
上がりすぎて危うく山に『ダイナミックトンネル工事』をしてしまうところだった。
「ふぅ。落ち着け自分…」
落ち着いた。
今回の目的を忘れるな。
そう、今回の目的は……皆が喜びそうなお土産を持って帰ることだ！！

……

……

……

「あれ？　なんか足りないような…。ま、いいか」
細かいことは、気にしない気にしない。

「やっぱり誰か連れてくれれば良かったかなー。
話し相手が居ないのは久しぶりだよ。
寂しいな～」

もちろん、連れてこなかったのには理由がある。
マザーレギオンの飛行速度は最大マッハ１だが、ソルジャーは時速１５０ｋｍなのだ。
どう頑張っても追いつけない。
だけど、速度落としてでも１人くらい付いてきてもらうべきだっただろうか。

「それにしても、さっきからぽつぽつ見かけるデッカイ蟻塚みたいなあれは一体何だ？
スカイツリーよりでかいんじゃない？
この世界の蟻、あんな馬鹿デカイもの造るの？　だとしたら恐ろしい。
間違いなくこの地球最強だろう。数的に。
そして数が居るということは、それを捕食する奴が居るということ。
もしいるならどんな生き物だろうか…」
独り言が多くなる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ん？　何ぞアレ？」

幾つか目の蟻塚を通り過ぎたとき、地面を走る集団を見つけた。

「ちょっと近寄ってみるか。」ブーン。

「きめぇ。」
素直な第１印象。
地面を走っていたのは人間みたいな上半身と、その下にでかい口を付けた４本足の生き物。それと硬そうな甲殻に前面を覆われた１０m以上ある生き物だった。
「何だろ、すげーキモイ。流石に世界が違うと進化の形も違うんだな～」
その生き物（小さい方）をビュートで絡め取り観察する。もちろん力は入れてないから切断とかはない。

「ん～、こいつ何かに似てる気がするんだよな。
……。
あ、こいつカオ○シになんか似てる」
『千と千尋』にでてきたカオナシっぽいな。
ちなみに食いまくってでかくなってたあの状態。
「そうそう、カ○ナシそっくりだ。主に口とか。つーか口が」
それにしても、人間みたいな上半身だな。
「！　ひょっとして別方向に進化した人類！？
いや、それはないか…。
こっちのでかい奴は王蟲っぽいな」
王蟲と言えば『風の谷の○ウシカ』で有名な蟲だ。
まさかこんな処でジ○リに出会うことになろうとは。
こいつ等があの蟻塚造ったのだろうか。
「そういやこいつら襲ってこないな。
見た目の割に温厚な生き物なんだろうか…。
このきれいな歯並びからしておそらく草食か雑食。
蟻塚の周りにはほとんど植物が無いから前者かな。
それに器用そうな手を持ってるし…意外と知性は高いのかな？」
正直そうは思えないけど。

「こっちの王蟲モドキもどう見ても肉食じゃなさそうだ。
やはり草食か。
それとも見えないだけで何処かに口が隠してあるとか…」

想像するとキモイな。
硬い甲殻に覆われた体をひっくり返すと、本来腹があるべき場所にはびっしりと鋭い歯が並んだ口が…。
キモすぎる。
確かめないけどな！
そいつらが出てきたと思しき場所を見てみると、大きな穴があいていた。

「ちょっとお邪魔させてもらおう。
穴が小さいな。
ならば、変　身！」ピカー（発光）
「人間モード。さて、ちょっくらお宅拝見と行きますか。
お邪魔しま～す」

そう言って穴から中へ入って行った。

第十五話（後書き）

何だかどんどん変な方向になって行く……。
このままだと平和√行き何だが、大丈夫か？
嗚呼、レギオン無双が再び遠のく……。

２０１１．７．２９指摘があったので一部削除&修正

第十六話　最近暑い日が続きますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？（前書

お気に入り登録数が６００件超えとりました。
ただただ、驚くばかりです。
それでは、ドーゾ

第十六話　最近暑い日が続きますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

～前回のあらすじ～
突撃！　お宅拝見！

只今暗い洞窟の中を進んでおります。

「この穴暗いな～。
まあ、可視光線以外も見えるから壁にぶつかる、とかはしないんだけどね」

レギオンは電磁波を視覚で捕えることができるのだ。
おかげで普通なら何も見えないような暗闇でも見ることができる。

「あれ？　確かトリコにそんなキャラが居た様な……。
便利だね、この能力。
これで暗い夜道も大丈夫（笑）」

何を言っとるんだろうか自分は……。

しばらく歩いていると大きな縦穴にでた。

「うおっ、空が見える。
この蟻塚の中って、空洞だったのか。
そう言えばこの蟻塚、今まで見かけたなかでは1番でかかったな。
でかくなると穴を開けるのか…。

ますます良く分からない生き物だな、あのカオナシモドキは」

この縦穴どうするか。流石に飛び下りる訳にはいかないし…。

下りるための横穴を探してみよう。多分どっかにあるだろう。

「あったな。

よく見ると横穴だらけだ。

うーん。ますます蟻の巣みたいだな。

あいつらって実は蟻の進化系？

見た目は昆虫ですらないけど……。

あっ、てことはこの巣の奥には女王（クイーン）とかいるかも。

レギオンと蟻や蜂って生態が似てるし、もしかしたら仲良くできるかな？」

少し期待しつつ奥へと向かう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「～♪～？」

鼻歌を歌いつつ歩く。決して1人が心細い訳ではない。

それより先ほどから、ちらほらとか言うレベルじゃない位カオナシモドキ見かけるんだけど。

無限湧きなの？

おまけにさっき象みたいな鼻付けた奴が居た。

「とりあえずノーズハンド、略して『ノズ☆ハン』と名付けよう！

○ブリからの刺客じゃなくて残念だ（笑）

正直言うと、鼻より頭に付いてるキノコっぽいものの方が気になった！

食えるんかな？」

腹減って来たな。

みんなちゃんとご飯食べてるかな？

少し心配になってきた。

でも、1号しっかりしてるし、三月は1番の常識人だし、大丈夫だよね……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

～一方その頃～

「ねえ、アル。

一体何してるの？」

「もしもの時に備えて、体を鍛えているのでゴンス！」ふんっ　ふんっ

「鍛えられるの？　その体……。

あ、お兄様、もう食事の時間ですよ」

『やることがある。私は後でいいよ』

「じゃあ、信二お兄様は……」

「ちょ、おまっｗｗｗ寺ワロスｗｗダゼｗｗｗ
クソスレ立てんなｗｗｗダゼｗｗｗｗ」カタカタ

「もう何も言いません……」

クイクイ（裾を引っ張る）

「ん、あ、６号ちゃん。
なに？　お腹すいたの？」

『コクコク』（首を縦に振る）

「えーと、ちょっと待ってね。
あっ、７号どこ行くの！　これからご飯だから、おとなしくしてて」

『ダガ断ル！』ピュー

「あっ！」

『『『８号（９号）（１０号）はお腹がすきました。
ご飯はまだですか？　と、涙ながらに訴えます』』』

「え？　ちょ、ちょっと待ってね（汗）」

（みんな言うこと聞いてくれません。
お母様、三月の心は早くも折れそうです）（ノД｜。）クスン

ぽんぽん（↑肩を叩く音）

「姉さん、兄さん達は放っておきましょう。
食事時に居ないアホどもが悪いんです。
とっとと食べてしまいましょう、ナリ」

「コロちゃん……。
そうですね。
じゃあ、みんな、食べようか」

『『『わーい！　と、喜びの声を上げます』』』『コク』

意外としっかりしているのはコロ介であった……。
頑張れ三月、負けるな三月、２日間の辛抱だ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「何だか三月が苦労してそうな気がするよ……」

「長い…」

長すぎる。
しかも地図とかないからよく迷う。

「また、縦穴に出たよ……。
複雑すぎるだろ、この蟻の巣」

もう、あの縦穴から行こう。

「変　身　！」ピカー（発光）

「レギオンモード」

翅を伸ばし、いざ出撃！

「Ｉ　ｃａｎ　ｆｌｙ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

飛ぶと言うより、ホバリング。

翅を羽ばたかせながらゆっくりと降りてゆく。

「それにしても深いなこの穴。

どうやって掘ったんだろ。

ん～、俺も頑張ればいけるかな…。

いや、１人は無理だろうな。

皆が手伝ってくれればイケる」

と、あほなことを考えつつ、ゆっくりと降りる。

「や～っと底が見えた。

一体何ｋｍあるんだ？　この縦穴」

「な、何だ……これは……」
そこには青白い輝きを放つ不気味な巨大建造物があった。
「フォ、フォースだ。
巨大なフォースを感じるぞ。
……また何をあほなこと言ってんだか。
それにしてもこれ何だろ？
なんか衝撃与えると爆発しそうだ」
その巨大建造物は（以下青玉）、暗い地下の世界を青白い光で照らしだし、ある種の幻想的な美しさすら感じさせた。
「おや？」
青玉の上になにか居る。
「ひー、ふー、みー。
目が６つあるな。複眼かな？
遠くから見ると植物っぽくも見える…。
ひょっとしてあれが女王（クィーン）かな？
はっ！　そう言うことか！
この青玉はエッグチェンバーみたいなものか！
ここからあのカオナシモドキや王蟲モドキが生み出されているのだろう。
すごく親近感が湧いた。
言葉通じるかな？」

するとその女王(クイーン)が触手をこちらに伸ばしてきた。
ゆっくりと警戒するように。

それに対し、こちらもビュートを出す。
そしてこちらに伸ばしてきた触手に巻きつける。

その様子は、まるで握手をしているかの様であっただろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

しかし、これが悲劇の幕開けとなろうとは、この時だれも思いもしなかった……。

なんてこと、ある訳がない！

第十六話　最近暑い日が続きますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？（後書

いや～、最近熱いですね。
皆さんは大丈夫ですか？
自分はバイト先でダウンしてしまいました（笑）

しっかり水分補給はしましょう。
水分は大切です。

それではまた　ノシ

ところで、重頭脳級の１人称って何ですかね？
知っている方ヘルプ！
２０１１．７．２９指摘があったので一部削除&修正

第十七話　（前書き）

ドーゾ

第十七話

遠い昔、我らは造られた。
我らは資源を採掘するための道具だった。
創造主からの指令を受け、動き続けた。
我らは命令により、数を増やす。
そして星々を渡る。

何時からだろうか。
命令が来なくなったのは。

我らは続けた。
最後に受けた命令を。
資源採掘と言う使命を。

我ら『上位存在』は、この銀河中に散らばった。
そのすべてが繋がっている。

だが、誰の元にも命令は届いていない。

理由は分からない。
いや、考えない。
なぜなら、我らにそれを考える必要が無いから。

そう、考える必要はない。
我らにはやるべき事があるのだから。

この惑星は災害が多い。
我らと同じ、炭素で構成された存在。
そして資源。

『人類』は今も作業を妨害してくる。
数も少なく、弱い。
だが、妨害する。
だから『存在』達によりその数を減らし続ける。

人類を捕え、解析する。
それらも資源として使う。

災害は、発生する前に叩くのがいい。
妨害によって、作業効率が低下する前に……。

何かが来た。
近くの惑星に存在する『上位存在』達に問いかける。

だが、誰も確認していない。
いきなり宇宙から出現した。
詳細は不明。
だが、何か、懐かしい……。

【それ】は接近していた。
この場所に。
まるで此処を目指すように。

周囲を監視する『存在』から伝わった。
【それ】が此処に来る。

何故？
分からない。
情報が少なすぎる。

それは下位の『存在』と接触した。
人類とは違い、こちらを攻撃をしない。

【それ】はこちらに移動する。
此処を目指すかのように。

混乱した。

巨大な体が、光が発生し、縮小した。

【それ】は人類と同じ姿に変わった。
だが、『存在』達を観察するだけだ。
理解できない。

そして【それ】は来た。

飛行しながら、真上から下りて来た。

【それ】は此処を眺めていた。

そして【それ】こちらに気付いた。

触手を伸ばす。
何故か躊躇ってしまう。

【それ】も触手を伸ばし、こちらの触手に絡める。
【それ】は創造主と同じ、珪素で構成された生命体であった。
この銀河に存在する、数少ない珪素系生命体。

だからだろうか。

『貴方は何者か？』

そう問い掛けていた。

【それ】は答えた。

『我が名はレギオン。
我々は大勢であるが故に』

第十七話　（後書き）

重頭脳級視点でした。

言いたいことは沢山あると思うが、まあ、気にしないでくれ。

コトブキヤからも新たなキットが出るそうで。
いいですね。

激震ト陽炎マダー？
２０１１．８．２３一部修正

第十八話　突撃！　隣？のオリジナルハイヴ　前編（前書き）

１８話です。

ドーゾ。

第十八話　突撃！　隣？のオリジナルハイヴ　前編

～前回？のあらすじ～
未知との遭遇

触手にビュートを絡ませて数分経った。
女王（クィーン）が『貴方は何者か？』と問い掛けてきた。

何者か？
つまり「名は何か？」と聞かれているようなもの。

テンション上がってしまったんだよ。
だからだろうね。

「我が名はレギオン。
我々は、大勢であるが故に」
だなんてアホな発言してしまったんだよ。

この後すぐに正気に戻って、めちゃくちゃ恥ずかしかったさ。
だって考えてみてほしい。
いきなり不法侵入してきた奴に、「お前は誰だ？」って聞いたら、そいつは「我が名はレギオン。我々は、大勢であるが故に」（キリッ）とか言うわけだよ。
……。
死にたいくらい恥ずかしいさ！
穴があったら入りたいよ！
もっと普通にあいさつ出来なかったのかと数秒前の自分を殴り飛

ばしたい気分だ！

でも、レギオンモードでよかった。
人間モードだったら、間違いなく顔真っ赤だよ。
多分リアルで穴掘ってそこに入ってたよ。

あっ、そう言えばここ穴の中だった……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

と心の中で悶えつつ、彼（彼女？）と話をする。

驚いたことに、彼（彼女？）は月から来たんだとか。
ヤック・デカルチャー。

履歴書に出身地『地球外』、と書ける仲間が見つかった訳だ。
何故か嬉しくなったよ。

で、何でこの星に来たのか聞いたら、資源を集める為らしい。
なんでも創造主（上司？）にそう命令されたんだとか。
仕事熱心だね。

だけど、この星は災害が多くて中々進まないそうだ。
災害か……。
地震、雷、火事、親父ｅｔｃ
確かに大変だろう。
でも、それより月の方が大変そうだけどな～。
空気とか、デブリとか、温度とか。
え、全然問題ない？

そうですか、うらやましい。

ところで、何でさっきから敬語なの？

へ～、上司の人って珪素なんだ。
意外と居るんだね、珪素生命体って。
だから敬語なん？
でも俺君の上司じゃないから、そんな態度取られても困るよ？

そう言えば、給料いくら？
え？　無いの！
よく暴動起きないね。
ん？
自分たちは道具だから当然？

いや、それはダメでしょ。
泣き寝入りはよくないよ。
その上司に連絡取れる？
１回ビシッと言ってやんないと。
え？
連絡取れないの？
何年も！？
それって、知らぬ間にリストラｏｒ上司の方死んだってことじゃない？
多分後者だろうけど。

あれ？
なんか、ものすごくショックを受けた様な顔になってるよ。（雰囲気的に）

それでも採掘は続ける？
イイハナシダナー。

え？
他の上位存在と相談する？
何の？

……。
もう一度言うけど、俺君の上司じゃないから、そんな態度取られても困るよ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

とまあ、こんな感じで話をする。
その中で分かったのだが、あのカ〇ナシモドキや王蟲モドキ、『ノズ☆ハン』も作業用として造られたらしい。
具体的には、カオ〇シモドキはあの口で岩やらなんやらをかみ砕いて運び、王蟲モドキはブルドーザーみたいに重いものを移動させ、『ノズ☆ハン』は細かい作業などをするらしい。
まさに生きた重機なんですね。

一家に1匹欲しいな。
まあ、自分は簡単に穴とか掘れるから、イランすけどね。
穴掘って必要なのは珪素だけだし。
あ、そうだ忘れるとこだった。
「何処かに金目の物とか埋まって無い？」

『金目の物？』

「金とか銀とか、希少価値の高いものかな」

『よく解りませんが、こう言う物ですか？』ズイッ

……。

金ですな。

それも金塊です。

「どうしたんです、これ？」

『この付近を散策していた際、偶然発見しました』

「いや、流石にこれはね、うん。

しっかり保存しときんさい。

（多分埋蔵金か何かだろうな）」

『では、こちらを』

「ほう、指輪か。

それに腕輪、ネックレス、ペンダントｅｔｃ

しかもこれ全部スゲー高そうなんだが」

『持って行って頂いてかまいません。

我らには不必要な物ですから』

「そうなの？　何か悪いね。

所で君、名前何だっけ？

今更だけど」

『上位存在です』

「それ管理人的な意味だよね？
何人も居るわけでしょ、その上位存在って」

『その通りです』

「そう言うのじゃなくて、君個人の名前。
何かない？」

『その様な物は存在しません』

「そうか、無いのか。
そんなら、イリスって呼んでもいいかね？
何か初めて見た時からこの名前が頭から離れないんだが」

『イリス……』

「どうや？」

『……』

表情が変わらないから全く分からんが、拒否してないから悪くは無いのだろう。
もっと家の子達みたいに、感情出してもいいんじゃないかね？

とりあえず、お土産&資金源ゲット！

第十八話　突撃！　隣？のオリジナルハイヴ　前編（後書き）

ふう。
ようやく書き終わった。
レギオンカッケーけど、イリスもスゲーよな。
イリスちゃんマジ天使。

そろそろ、別の作品何か書いてみようかな……。
ガンダム系とかで。
ＩＳとかどうかな。
でも、こう言うのは既に使い古されてるか。
実はガイバー系とか、ちょっと考えてたり。
マイナーなのってなんかいいよね。
やめといた方がいいかな？

第十九話　突撃！　隣？のオリジナルハイヴ　後編（前書き）

今更だが、この小説名前負けしてるような気がする。
いっその事『とある男のＤＯ・ＫＩ・ＤＯ・ＫＩレギオン日記』とかにでも変えてしまおうか。

関係無いですが、前後篇に分けた意味、全然無いです。
ドーゾ

第十九話　突撃！　隣？のオリジナルハイヴ　後編

～前回のあらすじ～
資金源ゲット。

あの後、蟻塚で一夜を明かしたよ。
広い空間ってなんか落ち着かんね。
今まで狭い所にいたせいだろうか。

それよりも、今ひじょ～～～～～～～～に困ったことになっているのですが、どうしましょう。

『貴方を一時的に創造主の代理として扱わせていただきたいのですが、よろしいですか？』

どうしてそうなった……。

？？？？？？？

話を聞いたところ、昨日仲間たちと話し合った結果らしい。
なんでも、創造主が既に存在しない可能性は高いが、かと言って存在している可能性も未だうんたらかんたら。

だから一時的に俺を創造主の代理として扱ううんたらかんたら……。

つまり簡単に言うと、

（地球）もう上司死んどるんじゃないかって言われたんだが。

←

（火星）でも、誰も確認しとらんから分からぞ。下手したら処分されるかもガクブル。

←

（月）まて、まだ慌てるような時間じゃない。

←

（どっかの星Ａ）だがこのまま働いてても無駄じゃろ？

←

（ガニメデ）そうは言うがな大佐。

←

（Ｍ７８）つーか、そこに知的珪素系生物居るんなら、そいつ代わりにすればいんじゃね？

←

（月）お前天才！

←

（火星）おぃい、それでいいのか？

←

（どっかの星Ｂ）もっと熱くなれよーーー！！

←

（地球）仕方がない、ダメもとで頼んでみるか……。

と言う感じ。

※注、あくまで主人公の想像デス。決してこう言う会話がされた訳ではありません。

？？？？？？？？？？

つまり、俺に上司の代わりになってくれと頼んでるのか。

まあ、悪い気はしないけど……。
しかし、一時的って何時までだ？
つーか代理って何すればいいわけ？

………。

その、どこまでも付いて行きます的な、しかもキレイな目でこっち見るのやめてよ。
俺に付いてきても給料出無いよ。
そもそもやること無いよ。
え？
いいの！？
君はそれでいいのかい？

あ！
そう言えば、草体の件があったな。

ちょっと聞きたいのだが、ここ等辺で大爆発起こしても大丈夫そうな場所ってあるかね？
ありそうなら教えてほしいんだけど。
規模？
多分半径６ｋｍが吹き飛ぶ位の爆発。
できれば支えがあった方がいいかな。
そうそう、この上にある蟻塚より2回り位小さい大きさ。

へ？
何言ってんの。
流石にここは使えないよ。
みんな蒸発するじゃん。
『なら他のを使っていい』って、そうじゃないでしょ。
まだあのちっちゃいのやら、デカイのやら住んでるでしょ。
じゃ、ダメじゃね？
『どうぞお気になさらずに』って、だからこっちが気にするっちゅーねん！
？？？？？？？

壮絶な押し問答の末、ここから５０ｋｍ程離れた場所に蟻塚だけ造ってもらえることになった。
ありがとう。
完成まで３ヶ月位は掛かるらしい。
中々早い。
それまでは、皆で旅行にでも行っておこう。

まあ、まずは資金源が入った事をあの子らに伝えよう。
イリスにも行くかいって誘ったんだけど、無理だと。
確かに管理職の人がそう簡単に休めるわけないもんな。
しかし、やっぱり新たな仲間を皆に紹介したいしなー。
う～ん。
……。
そうだ！
皆で戻ってこよう。

何気にこの場所気に入ってるんだよねー。
それでいいかな？

ＯＫのようだ。
とりあえず１回帰ろう。

第十九話　突撃！　隣？のオリジナルハイヴ　後編（後書き）

少し短かったかな。

そう言えば、先日「トランスフォーマー・ダークサイドムーン」観てきました。

メガトロン様ェ。
そして司令官無双。
面白かったな……。

これから少し忙しくなるので、次の更新遅れるかもしれません。

ＩＦ　人類の敵ＥＮＤ（前書き）

もしも、この作品がシリアスならこんな感じか。
よし、逝ってこい！
（、・ω・？）ゝ
１０．２「外伝１　真面目な感じ」から題名を変更

ＩＦ　人類の敵ＥＮＤ

外伝１

「よくここまで来ることができたな……。
チビで脆弱な脊椎動物如きが」

辺りは暗く、時折轟音が響きわたる。
周囲には異形の物たちの骸が転がり、まるで地獄の入口のようだ。

ここに居るのは二人の男女。
しかし女は人間ではなく、男も巨大な鎧に身を包む。
戦術機と言う名の鎧に。

「やっとここまで辿りついた。
沢山の仲間たちを、命を犠牲にしてな……。
だけど、決して無駄にはしない！
ここでお前を倒して、この地球を取り戻す！！」

男が、白銀武がそう叫ぶ。

女は不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ。
たかが人間１人、できることなど知れていようにに。
貴様１人がどう足掻こうと無駄だろうさ。
外の奴らは哀れだな。
お前が私を倒し、世界に平和をもたらすことを願っている。信じている。

まるで、どこぞのおとぎ話の勇者の様ではないか。
だが、その願いが叶うことは決してない。
お前はここで死ぬ。そしてその骸を世界に晒してやろう。
奴らの目の前でゆっくり解体し、その腸（ハラワタ）を引きずり出してやろうではないか。
そうすれば私に抗う気力もなくなるだろう。
まあもっとも、その頃には人類に抵抗する力など残ってはおるまいがな！」

「どう言うことだ！」

「既に草体（プラント）の種は芽吹いた……」

「なっ、馬鹿な！！
草体（プラント）の種は全て探し出し、凍結した！
種は世界に３つだけのはずだ！」

草体（プラント）。
突如現れた巨大な植物。
その威力はすさまじく、アメリカの首都が地下数百ｍから完全に蒸発したほどだ。
人類はその威力に恐怖した。
しかし、草体の種から出る特殊な電磁波を頼りに、種を探しだす装置が完成した。
国連所属の科学者が造り出したその装置により日本、ヨーロッパに仕掛けられていた草体（プラント）の種を発見、それを凍結させ宇宙に放りだした。

「草体１つの爆破で、半径５０ｋｍは吹き飛ぶ。
だが、うかつに手を出せばそれが引き金になるやもしれん。

だから芽を出す前に潰してしまわねばならん。
そんな時、都合よく種が特殊な電磁波を出すことがわかった？
しかもそれは長距離からでも発見可能なほど、強い電磁波を放出していた？
……。
これを信じたのならお前は相当な阿保だ。」

「何を言っている！」

「確かに電磁波を出していたさ。
お前たちがその装置で探し回っている間だけな！」

「どう言うことだ！」

「まだ気付かないのか？
お前たちは最初から、私の手の上で踊っていたにすぎんと言うことだ。
お前たちに、さらなる絶望を教える為、世界に種は3つしかない等と言う希望を与えてやったのだ。
その科学者とやらを探してみるがいい。
既に何処にも居ないだろうがな。」

「まさか……。
騙していたのか。
裏切ったのか、俺たちを」

「ふふふ。そう言ってやるな。
あの男も家族を守るために仕方なくやったのだ。」

「まさか家族を人質に取って。

！！　その男と家族はどうした！
小さな子供が居たはずだ！」

「なあに、今頃仲良く過ごしているさ。
……。
お前が切り捨てた、そこの戦車級の腹の中でな。」

ブチッ。
何かが切れた音がした。

「うおおおおおおお！！」

長刀を振りかぶり、一気に振り下ろす。
が、その一撃は弾かれる。

「何ぃ！」

女の後ろの壁が崩れ、中から何本もの触手が飛び出してくる。

「馬鹿な、重頭脳級！」

そこには、仲間達が命と引き換えに倒したはずの、敵の親玉がいた。

「何で重頭脳級が！
あの時倒したはずなのに！」

「こいつ等は唯の機械と同じ。
破壊されたなら、また造ればいいだけの話だ
そもそも、代わりなら幾らでも居るしな」

「貴様は命を何だと思っているんだ！
ＢＥＴＡの様に、炭素で構成される物は生命体ではないとでも言うつもりか！」

迫りくる触手を切り裂きながら、本体へ迫る。

「私はこいつ等とは違い、君達人類を生命体だと思っているよ」

「では、何故そんなことができる！」

「愚問だな。
殺したいからさ。
これ以上の理由がいるか？
お前ら人類も殺し合うではないか。
互いを生命体と認識しておきながら、果てなく殺し合う。
それと大して変わらんだろう？」

「ふざけるなあああ！」

重頭脳級の頭を切り落とす。

「おお。見事だな、白銀よ」

「煩い、次はお前の番だ！　俺はお前をここで殺す。
今の会話だけで十分だ」

返り血に染まった機体で長刀を構える。

「ふふ。余り調子に乗るなよ、人類」

『極限の絶望をくれてやる』

周囲を照らし出す。

その光が収まった時、そこにいたのは１００ｍを超える、巨大な化け物だった。

「こ、これが……レギオンの姿」

２０ｍ近い大きさを持つ戦術機が、まるで玩具の様に見えてしまう。

『さあ、始めようではないか。

楽しい楽シイ殺シ合イヲナ』

？？？？？

勝ち目など無かった。

３６ｍｍも１２０ｍｍも効果が無く、長刀は容易く弾かれる。

光学兵器ですら中和し無効化する。

有効な手など１つも存在しない。

そして、レギオンの頭から放たれるマイクロ波は、一撃で戦術機１師団を壊滅させる程の威力がある。

掠っただけでも致命傷になりえる。

勝ち目など無かったのだ……。

「ぐ、馬鹿な。何で、効かない」

既に戦術機はボロボロだった。

装甲のあちこちが融け、切り刻まれている。

右腕はビュートで切り飛ばされ、握った長刀が壁に突き刺さる。
既に弾は底を尽き、短刀も折れた。
武器はもう無い。

『愚かだな。だから1人では無理だと言ったではないか。
上手く地上へでも引きずり出せば、砲撃を使ってダメージを与えられたかも知れんものを……。
所詮貴様はその程度なのだ』

「…クソったれ」

『これで終わりだ。サヨウナラ、シロガネ……』

レギオンから出てきたビュートが、その体を貫こうとする。
その時。

「ダメです、お母様ぁ！」

一機の戦術機が飛び込んでくる。

『！！　ミ…三月？
生キて、いたの？』

「そうです。私です。みなさんに助けて頂いたんです」

『そう、だったのか』

「だからお願いです。もうやめて下さい。
みんなが傷つく所何て観たくないんです。
だから！！」

『こいつ等が何をしたか、知っているかい？』

「え？」

『三月は知らないだろう。
他の皆、1号や2号達がどうなったのか。
人類にに殺されたのさ！』

「！！」

『奴ラハ無抵抗のあの子タチを撃った。
それどこロカ、我らを人類の脅威ト言イ張り、生き残った子ヲ解剖シタのさ。
生キタママネ！』

「そ、そんな。
コロ介や6号ちゃんも……」

『白銀、オ前は先ほど何故殺すカト聞いたな。コレハ復讐なのさ。
私の子供たちハ理不尽に無意味に殺された。
だからオマエラも理不尽に無意味に殺サレなくてはならない。
これが理由さ』

「その悲しみを知っているなら、何故同じ悲しみを与えようとする。
復讐したって、その子達は帰ってこないだろうに」

『在リ来たりな言葉だな。
全然心が震エナイな。
ナラバ、お前はドウダ？

惨たらシク食われた、潰さレた、溶カされた、焼かレタ、刺サれた。
悲鳴を上げ、殺サレテ行ク様ヲ見ただろウ。
お前は憎かったダロウ？　殺シタかっただろう？　根絶やしにしたカッタだろう？
ソウしたから、今此処ニイルのではナイカ？』

「だからと言って……」

『所詮貴様モ人ナノダ。
私トハ違ウ、ナ。
サア、終ワリダ、死ネ！』

「ダメです！　お母様！」

『邪魔ダ』

ドス。
ゆっくりと三月の戦術機が倒れる。

「三月ー！
何で……。あんたの、あんたの子供だろうがあああ！！」

壁に刺さった長刀を左手で抜き、切りかかる。

「あんたって人はー！」

『ソウコナクテハナ！　最大ノ力デカカッテ来イ、白銀ー！』

二つの巨体がぶつかり合う。

そして、最後に立っていたのは……。

「どうして、こんなことに。
私はただ、みんなで仲良く暮らしたいだけだったのに」

涙を流す三月の姿だけだった……。

?.?.?.?.?.?.?.?.?.?.?.?.?.

コーギー軍曹「ハッ！　　ドリームか……」

ＩＦ　人類の敵ＥＮＤ（後書き）

てへ☆ぺロ。

冗談はともかく、次の投稿は９月になりそうです。
こんなクソ文じゃなくて、本編書けよと言う方。
すまんかった。

登場人物設定（前書き）

9月に投稿すると言ったな……。
あれは嘘だ！

すいません、冗談です。
今更感ありますが、登場人物の設定です。

登場人物設定

主人公

名前　鋭田　零（レイ）（前世の名前は不明）
性別　♀（地球外生物であるため、人間の尺度には収まらない。ただし、本人は男だと言い張る）
年齢　生後１年未満（前世は２１歳）
呼び名　『ベールィ・ストーノシカ』（白ムカデの意）
　この作品の主人公。前世はロボット好きな、大学生。
　神様（幼女）に転生させられた、所謂（いわゆる）転生者。
　しかし、珪素系生命体レギオンに転生し、人外ボディに喜んだり悲しんだり。
　家族（サン＆ａｍｐ；ドーター）ができて騒がしくなったが、それを嬉しく思う。
　最近人間型に変身できるようになった。
　容姿は、白銀の髪、白い肌、青い瞳。身長は１７０ｃｍほど。
　そして胸に絶望。でも立ち直り早い。
　好きな物はロボット、嫌いな物は『Ｇ』、好きでも嫌いでも無いものは消しゴムだよ。
　最近部下が増えた。

必殺技
「マイクロ波シェル」：マイクロ波を収束させて打ちだす、所謂メーザー（マイクロ波レーザー）。
威力はチート。
「マイクロ波ビュート」マイクロ波っぽい何かで造られた触手。威力は原作以上となっている。

レギオン側

・ソルジャーレギオン1号
名前　鋭田　一樹
性別　♂
年齢　生後1ヶ月
ソルジャーレギオン第1号であり、ソルジャー兄弟の長男。
真面目な性格で、兄弟のまとめ役。
容姿は某中学テニス部部長似。
最近ファッションとして伊達眼鏡をかけている。
1人称は私。口調は基本敬語。

・ソルジャー2号
名前　鋭田　信二
性別　♂
年齢　生後1ヶ月
ソルジャーレギオン第2号。
面倒見がよく、弟ズ&妹ズからは意外と人気。
髪は茶色で目は黒。
見た目はややほっそりとしているが、無駄な肉が無いだけで、意外とガッチリしている。
最近はネラー化しており、妹達にネタを仕込んでいる。
1人称は俺。
口調は～ゼ、～ダゼ、を語尾に付けると言うスタンダードな物になっている。

・ソルジャー3号
名前　鋭田　三月
性別　♀

年齢　生後1ヶ月（前世は17歳）
ソルジャーレギオン第3号で二人目の転生者。
見た目は10歳くらいで髪は黒髪。
長さは肩よりやや下くらいで、可愛らしい顔つき。
面倒見がよく、真のまとめ役。兄2人からは、可愛がられる。
1人称は私。

・ソルジャー4号
名前　アレックス・鋭田
性別　♂
年齢　1ヶ月未満
ソルジャーレギオン第4号。
肉付きの良い、ガッチリとした筋肉質な体系で、趣味は筋トレ。
金髪の……世紀末覇者っぽい。
身長は2m位。
1人称は我輩。語尾にゴンスが付く。

・ソルジャー5号
名前　コロ介
性別　？
年齢　1ヶ月未満
ソルジャーレギオン第5号。
髪は赤みがかった茶色で短髪。中性的な顔付きをしており、華奢な体系。
しかし、見た目に反し力はある。
ソルジャーズの中では1番冷静（と言うより冷たい）。
三月になついている。
ちなみに、性別が分からないのは見た目のせいであり、決して作者が考えていない訳ではない！　ないったらない！

１人称は私。語尾にナリが付く。最近は申し訳程度に付いている。

・ソルジャー６号
名前　未定
性別　♀
年齢　生後数日
ソルジャーレギオン第６号。
小柄で無口な感じ。イメージとしては、『ゼロの使い魔』のタバサの黒髪バージョン。
ただし、食欲はそれほど旺盛ではない。
１人称は私。

・ソルジャー７号
名前　未定
性別　♂
年齢　生後数日
ソルジャーレギオン第７号。
最も会話の少ないキャラ。兎に角動き回るため、話に混ざらない。
未だ、人間形態になっていない（決まっていない）。
１人称は僕。

・ソルジャー８、９、１０号
名前　未定
性別　♀
年齢　生後数日
三つ子。
見た目は、まんま『とある科学の超電磁砲』のシスターズ。
口調らしい口調は特にない……？
常に３人いっぺんに喋る。
１人は自分の名前。

毎度お馴染み人類の敵
・重頭脳級
名前　イリス
性別、年齢？　何それ美味しいの？な感じ
呼び名　「あ号標的」「コア」
　オリジナルハイヴの中央部、４つの大広間に囲まれた空間に存在する固着型超大型頭脳種。自らを「上位存在」と称する。（Ｗｉｋｉ参照）
　主人公と接触し、創造主の所在について問われ、混乱。
　新たな命令系統を得るため、主人公を創造主代理として扱う。
　人類を生命体として認識していないのは相変わらずだが、これからどうなることやら。

人類側

名前　ユーリヤ・ノルシュテイン
性別　女性
年齢　２１歳
所属　ソビエト連邦
　２．５話で登場。
　階級は少尉。
　戦術機の操縦技術は天才的。
　しかし、真面目すぎる性格故か、常に前線に居る。
　イワン、ニコライの２名は、背中を預けられる数少ない仲間だと思っている。
　２．５話最後で中尉に昇格。その後調査隊に転属し、大尉に昇格。

名前　ニコライ・ベルマン
性別　男性
年齢　２６歳
所属　ソビエト連邦
性格は大雑把で直情型。隊の中では明るい性格で、良きムードメーカーでもある。
叩き上げの軍人。
イワンとは昔からの馴染みであり、本人曰く『同郷の気の回る戦友』。
階級は曹長。
調査隊に転属の際、准尉に昇格。

名前　イワン・アントーノフ
性別　男性
年齢　２５歳
所属　ソビエト連邦
性格は冷静で思考型。暴走しがちなニコライを抑え、ユーリヤを補佐する。
ただし、戦術機の適性が並より低いこともあり、ややコンプレックスがあったり、なかったり。
ニコライとは昔からの馴染みであり、本人曰く『中々切れない腐れ縁』。
俗に言う、幼馴染み。
階級は准尉。
調査隊に転属の際、少尉に昇格。

名前　白銀　武
性別　男性

年齢　１８歳
所属　国連軍
言わずと知れた原作主人公。戦術機の操縦で類い希な才能を発揮する。
外伝１に零のライバル？として登場。
作者の妄想のために、相討ちとなって（多分）死亡。
本編に登場するかは、作者の気分と妄想次第。
階級？　知らんがな。

登場人物設定（後書き）

設定ってほどのもんでもないね。

え～、前回あとがきで書いた通り、本文は9月に投稿します。

なんかスマソ。

第二十話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【前編】（前書き）

読者諸君よ！　私は帰って来た！！

８日前に顔出してましたね、はい。
９月には１日早いですがドーゾ。

第二十話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【前編】

～前回のあらすじ～
壮大なる
作者の
夢オチ

「今日は母上がご帰宅なさる日だ。全員でお出迎えすべきだろう」
「全員はいらねーだろ。2、3人で十分だと思うゼ。
俺は用事あるからパスの方向で」
「お土産楽しみですね、姉さん。ナリ」
「うん、そうだね。6号ちゃんは？」
「（楽しみ）」ボソッ
「そっか（ニコッ）
あれ？　7号ちゃんは？　また何処かに遊びに行ったの？」
「仕方ないでゴンス。母上が何時に帰ってくるか分からないのですから。
1日中此処で大人しくしていろ、と言うのは7号には少々酷かと思うでゴンス」

「「「それでも、朝起きて真っ先に外に飛び出して行くのはどうかと思うのです。
と、少々の不満をぼやいてみます」」」

「ふふ。後で、皆で連れ帰りに行きましょう」

今日はお母様が帰って来る日です。
お母様が居ないと、皆落ち着きが無くて大変でした。
何より、一樹お兄様が１番挙動不審で、少し……いえ、とても驚きました。
今は、信二お兄様と何やら、言い争っていまが……。

「用事とは何だ？　そもそも、お前は基本暇だろう。
こんな時くらい、皆と一緒に母上を労おうとは思わないのか？
少なくとも、お前と私は居るべきだ」

「だから、兄貴は硬すぎんだって。お袋だって、硬いよか軟い方が多分いいだろ？
もうちょっと気ー抜くべきだと思うゼ！
そんなだから、お袋にも『表情硬すぎワロタｗｗｗ』って言われんだゼ」

「い、言われた事無いぞ、そんなこと。
そう言うお前も、『田舎のヤンキーみたいな格好だな…』とか言われていただろう！
大体、お前は遊ぶ時間が無くなるのがいやなだけだろうが！
毎度毎度訳のわからん妙な言葉を三月達に覚えさせようとするんじゃない！！」

「ち、ちげーよ！　用事があるんだって、いやマジで。
あと、不良少年ぽいって言われたんだゼ！　何だよ、田舎のヤンキーって！
やっぱ兄貴は脳味噌が硬すぎて、言葉の意味理解できてねーんだゼ！」

ピキッ
「ほぅ。　信二よ……、お前とは1度しっかり話し合う必要がありそうだな！」
（＃ー ー）ピキピキ

あわわ、何だか剣呑な雰囲気になってきました。
「「……」」（アル＆ａｍｐ；コロ）

「（技の1号、力の2号）」ボソッ

「上等だな。俺も一度兄貴とは、Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩしたいと思ってたとこなんだゼ！」
（゜Д゜＃）ヤンノカゴルァ！！

「いいだろう。表へ出ろ！　相手になってやる」（＃゜Д゜）ドルァ！！

「いいのかよ。俺が本気出したら、やべーんだゼ？
パンチングマシーンで１００とか普通に出すし」

「良かろう。私に喧嘩を売った事、今すぐ後悔させてやる！」

「「いい加減にしろナリ（でゴンス）！」」ドゴォッ！！　ゲシィッ！！

「おーっとぉ。アル兄が信二兄へ、コロ姉が一兄へ、それぞれラリアットとわき腹への鋭い蹴りが炸裂！
両名、地面に倒れ悶絶中です」
「これは奇麗に入りましたね。私なら多分痛みで口がきけませんよ、あれ」
「何時も仏頂面で表情の変化が分かりにくい一兄と、常にヘラヘラ（ニヤニヤ）笑っている信二兄が地面に顔を擦りつけて呻いています、と、3人で今の抱腹絶倒ものの場面に笑いをこらえつつ、解説を行います」

「ばらばらに喋れたんだ、三つ子ちゃんは……。
そ、それよりお兄様、大丈夫ですか！」

「（大丈夫に見えない）」ボソッ

「―っこ、このく、くらい、何ともないさ」ガクガク

「と、とか何とかい、言いながら、あ、足が震えてるゼ。
まだね、寝てた方が、いいんじゃねーか？」グワングワン

「そ、そう言うお前、も、目の焦点が合ってないようだが？」

「どうやら、まだ食らい足りないようですね、ナリ」パキポキ

「そのようでゴンスな」バキッボキッ

「い、いや…まってくれ、冗談だ、冗談。は、ははは……」

「そ、そうだぜ。もうやらねーよ。へ、へへへ……」

――――――――――――――キタ――――――――――――――
―――

「む！」

「7号か！」

「？」

「「！！」」

「！」

「「「？」」」

「何か来たようだな……。三月！」

「え？　は、はい！」

「6号と三つ子を連れて地下へ避難しなさい。
コロ介も付いておいてくれ」

「分かったナリ。姉さん、こっちです」
「え？　何？　どうしたの？」
「詳しいことは後です。早くこっちに！」
「え？　え？？」
一体どうしたのでしょうか？

「よし、信二とアルは私と来い。途中で7号と合流しよう」
「分かったでゴンス。しかし、一体何者でしょうか」
「人類だろう。恐らくな」
「電磁波垂れ流しにしやがって。イライラすんゼ！」

「我輩が空から「いや、信二に行ってもらう。こいつが1番速いからな」分かったでゴンス」

「一発お見舞いしてやんゼ！」

「母上が居ない今、なるべく戦闘は避けたい。
絶対に当てるなよ、あくまで威嚇射撃のみに抑えろ」

「分かってるゼ」

「うむ。では」

「「「変身！」」」ピカー（発光）

？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

『ヤハリ人類カ』

街から10km程離れているだろうか。
人類の部隊が此方に向かって進行している。
恐らくこの街を目指しているのだろう。

『人型ノ大型兵器ガ六カ。オ袋ガ喜ビソウダナ。
ケド、殺リ合ウニハ、ケッコウ厄介ダゼ？』

『ソレデモ、ヤルコトハ変ワラナイ。奴ラヲ此処ニ近ヅケル訳ニハイカイカラナ』

『少々、会話ガシ辛イデゴンス。
コレ以上近ヅケバ、会話モ困難ニナルデショウナ』

『致シ方アルマイ。
四号ト七号ハ此処デ待テ。オ前達ニハ、後方支援ヲ頼ム。ワカッタナ！』

『ハーイ』

7号が気の抜けた返事をする。
こいつは状況を分かっているのだろうか……。

『七号ハ緊張感ノ欠片モネーナ。ケケケッ』

『ソレハオ前モドロウガ！
イイ加減気ヲ引キ締メロ。
数モ戦力モ此方ガ劣ル。
マトモニ戦ッテモ、勝チ目ハ無イ。
有ルトスレバマザーダガ、何時オ戻リニナルカ分カラナイ。
ダガ、今日中ニハ、オ戻リニナルハズダ。
ソレマデ時間ヲ稼グカ、モシクハ奴ラヲ撤退サセルカセネバナラナイ。
最悪我々ノ撤退モ考エネバナランガ……』

コロ介に街から撤退の準備をするよう伝えるべきか……。

『何トカナンダロ。

アイツ等ノ事心配スルノハ分カッケド、焦ッタッテ意味ネーゼ？
ソレヨカサッサト行コウゼ。』

『オ前モ気楽ダナ』

『アイツ等（人類）ブッ潰シタクテ、ウズウズシテンダヨ。
早ク行コウゼ！』

『……オ前話ヲ聞イテイタカ？

マアイイ。　　行クゾ！！』

『『応！！』』

『オー』

第二十話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【前編】（後書き）

無理やりな前後篇です。
後半読みにくいな～。
なんかサーセン。

第二十一話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【中編】（前書き）

急ピッチで書いたため少しおかしいかも。
ドーゾ。

第二十一話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【中編】

～前回のあらすじ～
特になし！

～Ｓｉｄｅ：？？？～

こんなことになるなら、調子に乗らなければよかった……。
自分は特別な存在なんかじゃない。ただ、この世界の物語を知っているだけ。
それだけで、まるで自分が物語の英雄（ヒーロー）になれると思いこんでいた。
でも、自分は何もできない……。

この世界は絶望で満ち溢れている。先の見えない地獄だ。それは自分にとっても変わらない。自分は世界を救える力なんて持っていない。
操縦技術は人より少し優れる程度。高い指揮能力があるわけでも無く、かと言って新たな武器や戦術機を生み出す技術があるわけでもない、ただの一般兵士にすぎないのだ。

ちょびっとシリアス風味。

オッス、お前ら元気か？　オラは元気だ！
俺は所謂転生者だ。
ある日気が付いたらこの世界に産まれていて、そしてこの世界がマブラヴの世界だと知った。
本気で絶望しかけたぜ、まったくよー。
生まれ変わるならもっと優しい世界がよかったよ、ＡＲＩＡとかさ……。
これならまだ宇宙最強（アイザックさん）のエンジニアと一緒にＵＳＧ石村散歩してた方がマシだろ？
せめてチートが欲しかった。
……デッドスペースとマブラヴ、あなたはどちらがお好み？

ちなみに、俺はＥＳＰ能力者だ。
産まれた国がロシア（今はまだソ連か）だよ！
もう最悪だよ！
このままだと脅威の生還率６％作戦に参加させられちまうじゃねーか！
何で結果知ってる作戦に参加して死なにゃーならんのだ！？
科学者連中は見るからにＭＡＤな奴ばっかだから、下手に未来知ってます何て言ったら、モルモットにされちまう。
おかげで誰にも相談出来やしねー！
食われて死ぬのも潰されて死ぬのもいやじゃ～い。

でも悪いことばっかりじゃないんだよな～。
何故かって？

『紅の姉妹』に会えたからさ！
クリスカとイーニァが可愛いんだよ、また。
まだ小さいからあんまり性格刺々しくないしさ。

もちろん俺はロリコンじゃねーし、変態でもねぇ。
それに戦術機に乗れた。そう戦術機だ！
ロボはいいね～。　脆
いけど！
やっぱ人型兵器って男の憧れじゃん？
いいよね～、ロボット。　壊
れやすいけどな！
マジでダメダメだよ、戦術機。
フラジールの名を付けてあげたいよ、ほんと。
プランD、所謂ピンチですね。　俺
の人生がな！

やっぱりチートが欲しいよ神様。ドミナントでいいから。
ニュータイプやスーパーコーディネーターじゃなくていいからさ。
イノベイターとか贅沢言わないからさ。
せめてドミナントにしてくれ。
じゃなきゃMS（モビルスーツ）やAC（アーマードコア）ネクストの設計図くれるとかさ……。
普通転生者ってそんな感じだろ？　いろんな特典持っててさ、俺
TUEEEEEするもんだろ？

ま、愚痴っても何も変わらないし、今やれることを考えよう。

只今自分はベールィストーノシカ調査隊にいます。
最初聞いた時、「は？　何やそれ？」って言っちゃったよ、お偉
いさんの前で！
何だそれ？　そんなん原作に居たか？　もしかして新種！？　と
頭ん中大混乱。
つーか何て名前だよ白ムカデって。
ネーミングセンス無いな～。
おまけに、光線級以上のレーザーを撃てて、地面に潜れて空も飛

べる。
そんな万能ＢＥＴＡいやすぎるわ！！　マジ勝てる気がしねーよ！
ま～た、死亡フラグが立った気がするよ。
ただでさえＥＳＰ能力者ってだけで、フラグ立ちまくってるようなもんなのに……。

大体、何で自分がこんなことを。そんなの一般兵士や科学者にでもやらせろよ！
いくらリーディングが必要だからって、ほとんど情報ない相手にこんな新兵送り出すとか何考えてんだか。
もっとベテランが居るだろ？　こういう事はさ！
リーディングとプロジェクションは並。操縦技術は並より少し上な程度の奴をこんな作戦に出すとか……。
はっ！！　まさか、厄介払いか！
確かに少々反抗的ではあったけど、やったことなんて嫌いな研究員に殴りかかったり、嫌いな上官落とし穴に落としたり、嫌いな研究員共のデスクに蟲（Ｇ）をたっぷり入れておいたりした位で……。
うーん、大したことはしてないんだがな～。

～Ｓｉｄｅ：ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ：ユーリヤ～

「もうすぐ例の街です」

もう見えたのか。
私たちは今、ベールィストーノシカがロストした地点に最も近い街へ歩を進めている。
その街は既に住民は避難していて、今は完全なゴーストタウンとなっている。

驚いたことにまだＢＥＴＡの被害を受けていないようで、奇麗なまま残っているようだ。

「そうか。
今のところ、姿は確認出来ず、だな。
だが、気は抜くな。何時ＢＥＴＡの襲撃を受けてもおかしくない」

「ま、もし奇襲を受けたら、あっという間に全滅しちまうような数ですがね」

この隊は私を隊長とする、２小隊、つまり戦術機６機の編成だ。
後は戦闘車両が３台。
これは少し、いやかなり酷い。
小規模な調査隊とは言え、このような場合１中隊＝１２機の編成が普通だ。
いくら人手がないと言っても、これでもしＢＥＴＡとの戦闘になれば、間違いなく壊滅するだろう。
戦力の無駄遣いだ。

「仕方なかろう。唯でさえ戦力が不足しているんだ。むしろ、よくこんなことに戦力を割けたものだ」

「ま、確かにそうですがね。
それより隊長、後ろの超能力者の事ですが」

「何だ？」

「本当に役に立つんですかい？　超能力何てオカルトを戦場に持ち込むなんて、上の連中は何考えてんですかねぇ」

「ニコライ、超能力者じゃなくＥＳＰ能力者だ。それに、上は本気で取り組んでいるらしいぞ」
「『オルタネイティブ３』だっけか？　ホントにＢＥＴＡ相手の戦力になるんですかねぇ？
疑わしい限りですよ。隊長はどう思います？」
「いいのかお前達」
「何がです？」
「ＥＳＰ能力者とは心を読めるそうだ。お前たちの考えていることは全部筒抜けかも知れんぞ」
「うげっ、マジですかい！　やべーな、どうするイワン」
「作戦行動中だぞ、少尉と呼べ！」
「硬いこと言うなよ、イ・ワ・ン少尉殿」
「いい加減にしろ。そろそろ街だ。
街で何もないようなら、１度帰還することになｒ……！」

その時、上空から一筋の光が落ちる。
その光は我々の前方５０ｍ程の場所に、焦げ跡でラインを作り上げた。
まるで、そこを境界線だと言うかの様に。
「なっ、レーザー！！　ＢＥＴＡか！　何処だ！」

「馬鹿な、上空からだと！」

「隊長！　あれを見て下さい！」

見上げるとそこには、２m程の大きさを持つベールィストーノシカ小型種が滞空していた。

「あれがベールィストーノシカ……」

「ちっとも白くねーじゃんよ」

確かに。

第二十一話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【中編】（後書き）

（，・ω・、）

この間やっとさＡＣ４とｆａ買いました。

ネクスト機動性高杉じゃありません？

全然目が付いていかない！

液晶から光が逆流する……ギャアアアアアアアアアアアアアアア！！

第二十二話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【後編】（前書き）

人類視点です。
ドーゾ。

第二十二話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【後編】

～前回のあらすじ～
未知との遭遇

～Ｓａｉｄ：？？？～

おい！　もうそろそろ名前出してもいいだろ？　何時までも？？？は酷いぜ！
とりあえず自己紹介、俺の名前はシモ・ヘイヘだ。
……すいません嘘です。
本当はアレクサンドル・ヴェルデニコフです。
階級は少尉だ。ちなみにピチピチの１４歳だぜ！
あれ？　俺は一体誰に説明しているんだ？
……まあいいか。
今何をしているかと言えば、どっかで見たことがある（ような気がする）生物と睨みあいの真っ最中さ！
どうしてこうなった。

「サイキック少尉殿、出番だぜ」

「サイキックではなくＥＳＰ能力者ですが」

「大して変わんねーだろ、サイキック少尉。さっさと仕事してくれよ」

さっきからサイキックサイキック煩いこの人はニコライ・ベルマン（２６歳独身）。階級は准尉だそうだ。
……准尉のくせに生意気な。

そりゃね、１０以上年上で実践経験も豊富、部隊では良きムードメーカーらしいってことは聞いてるよ。
でも上官に対してタメ口でいいの？　確かに俺ガキだけどさ、普通営倉送りだよ！
それともソ連はこれがデフォなのか？　……大丈夫なのかソビエト軍。

まあ、愚痴もこの辺にしとくか。今は目の前のあいつ等を何とかしないと。
あの黒い色した白ムカデを！

それにしても、あいつ等どっかで見たことあるんだよな～。
エ〇リアン？　それともデスト〇イア？
何かの映画で出てきたような……。
あ～だめだ、思い出せね～。

まあいいや、とりあえずリーディングでもするか……。

意識読解（リーディング）。
これは、頭の中の思考を『画』として感情を『色』で読み取る能力であり、ＥＳＰ能力者最大の特徴。オルタネイティブ３の要でもある。
早い話が天然の嘘発見器。俺なら絶対友達にはなれない。

～リーディング中～

うわぁ……、敵意しか感じられねー。
何か親の仇ってくらい殺意バリバリじゃん。
これ下手したら今日が命日になるかも……。

「これは……敵意しか感じられませんね。
何時攻撃されても可笑しくないでしょう」

「うげぇ、マジかよ。隊長、さっさとずらかりましょうぜ」

「まあ待て。
少尉、貴官はプロジェクションと言う物を使えるそうだな」

この人は、ユーリヤ・ノルシュテイン大尉（21歳）。この調査隊の隊長で、最初に白ムカデと遭遇（発見？）した人だ。
つまりこのメンドクサイ仕事を増やしてくれやがった張本人である！
でもそれ以外は特に何もない普通の軍人さんのようだ。
見た目はクール系美人（それでもこの世界じゃ、美人が多いせいか普通に見える）。

「はい、そうですが」

「それを使って彼らに、我々に敵意がないと言うことを伝えられないか？」

意識投影（プロジェクション）とは意識読解（リーディング）と対をなす能力で、文字通り相手に自分の思考や感情をイメージに変えて投影する能力のことだ。
リーディングで相手の意思を読み取り、プロジェクションで『平

和』のイメージを相手に送りつける。これによりＢＥＴＡと意思疎通を行う計画、（要訳すると）それがオルタネイティブ３だ。
だけど……。

「この距離では無理です。自分はプロジェクションに関しては、他の者より劣っていますので」

俺の欠点の一つにプロジェクション能力の低さが挙げられる。
これぱっかりは、どうしようもない。
おかげで処分されそうになった事が何回有ったことか……。

「隊長、少尉殿もこう言ってることですし、大人しく下がりましょうぜ。
そんで科学者連中にでも代わってもらえばいいんですよ。
あいつ等の住処も分かったんですし、任務はもう十分だと思いますがねぇ」

「どうしたんだニコライ？　あんなにベールィストーノシカを見たがっていたではないか」

「ああ、なるほど。
隊長、恐らくニコライは想像していたベールィストーノシカと余りに違うからガッカリしているのですよ」

この人はイワン少尉。
戦術機の適性はギリギリらしいが、それを補って余りある冷静さを持っている（らしい）。
だが少なくともこの作戦中でこの人がその能力を発揮したことは無い。

「子供かお前は。
作戦前に小型種らしきものが存在すると言う話をしておいたはずだが？」
「で、ですがね……。いくらなんでもあれは、その……。ねぇ？」
「……」
「……」
「その憐れむような眼、やめて下さい（泣）
巨大な未確認生物って言われたら、男なら少なからず期待するもんですよ！」

今まさに敵陣の真ん前に居ると言うのに呑気だな、この人たち。
本当に軍人なのか？　優秀な軍人って聞いてたんだけど、イメージと違うな。
何と言うかこう、ハー〇マン軍曹と言うか、もっと堅物な軍人を想像していたんだが……。
これでいいのかソビエト軍。
え？　青蛙軍曹？　あれは軍人じゃねぇ！　軍人の格好をした民間人だ！
「まだ発見したのは小型種だけだ。恐らく大型種は奥に居るのだろう」
「しかしその大型種と会うには、彼らをどうにかしなければなりま

せんね。
そもそもどれほどの知能があるかすら分かっていませんし、行動を起こすには少々判断材料が足りませんね」

「ふむ、そこが問題だな。
だが、人類を前にしてスグに襲ってこないと言うことは、彼らがＢＥＴＡではないという証拠になる。取りあえずこの情報だけでも本部に持ち帰ろう」

「え？　結局ベールィストーノシカ見て行かないんスか！」

「お前は戻りたいのか残りたいのかどっちなんだ」

「ユ、ユーリヤ大尉！」

「ん？　何だ、イムラン中尉」

こいつはイムラン中尉。
どっかの隊から、数合わせ的に出された衛士だ。
正直軍人としての能力は皆無。一度リーディングしてみたが、賄賂やら何やらで出世することだけを考えてるような奴だった。このご時世に何を考えてるんだか……。
もう一人はえーと……名前忘れた。軍人Ａとでも呼ぼう。確かイムラン中尉と同じ隊から来たはずだ。

「わ、我々の任務は情報を集めることだろう。
だが奴らがこ、こちらを警戒していると言うのならば、一旦引いて後日また調査に来るべきではないか？
奴らの姿も記録した。調査資料としては十分だろ？
そ、それに何時ＢＥＴＡに襲われるか分からない。早めに本部へ戻

るべきだ！」

どうやらこの中尉殿はさっさと帰りたいようだ。

「わ、私も中尉の意見に賛成です」

軍人Aさんも同じか。

「分かった。ならば隊を二つに分けよう。
イムラン中尉他2名は先に情報を持って戻れ。
私とイワン、ニコライは此処に残り調査を行う、それでいいな？」

え？　俺も帰んの？

「大尉殿！　私はESP能力者の有用性を証明するために、この作戦に参加しています。
ですが、この程度の成果では十分では有りません。
ですからここに残り、共に調査させて下さい！」

正直あの面子で帰り際に襲撃されたら生き残れる自信ない。
この人たち腕は立つらしいから、此処にいた方が生き残る確率は高いだろう。

「分かった。そこまで言うなら残れ。では先に2名は戻れ」

「「了解です！」」

？？？？？？？？？？？？？

「少尉、彼らの様子はどうだ？　何か変化はないか？」
「いえ、未だこちらに対して敵意を抱いています」
「隊長、此方から喋りかけてみたらどうです？　何か反応してくれるかもしれませんぜ」
「お前はまた突拍子もないことを……」
「でなきゃあの線ギリギリまで近づいてみればいいんじゃねッすか？　このまま止まっててもどうにもなりませんぜ」
「確かにこのままでは埒が明かないな……。どうするべきか」

ビーッビーッ

急に鳴り出す警戒音。
「―ッ！　何だ！」
「分かりません。急に近くに巨大な物体が！」
なんだよ、さっきまでレーダーにはあんなもの映ってなかったぞ！
「空だ！　空に何かいます！」

「あれは……」

「えっ？　何あれ、バジュラ？」

空中から現れたのは巨大な甲殻類だった！

第二十二話　え？ザク？　Ｊ型が好みですが何か？【後編】（後書き）

作＜またストックが切れた。またしばらく時間が……。
！！　だれだ！

？「さあどうした作者？
まだストックが切れただけだぞ、書いてこい！
パソコンを起動させろ！！
ページを開け！！
妄想を文字に表し！！
その文章を投稿しろ！！

さあ作品の連載はこれからだ！！
お楽しみはこれからだ！！
ハリー！
ハリーハリー！
ハリーハリーハリー！」

作＜バ、バケモノメー

「……しょせんこんな物か小僧。
お前はまるでくそのような男だ。犬のくそになってしまえ」

作＜アーッ

昨日見た夢

アンケートっぽい何か（前書き）

話の続きを期待していたみなさん、すいません。

アンケートっぽい何か

いきなりですが１０月６と見せかけて５日までアンケート（の様な物）を行いたいと思います。
アンケートと言うよりはただ意見が聞きたいだけと言いいますか……。
この作品の終わりが作者にも見えてこないので、ちょっと皆さんからお知恵を拝借したいと言いますか……。
取りあえずこの中から選んでください。

？　人類とＢＥＴＡを仲介。
さっさと戦いを終わらせてしまう『原作なんて最初からなかったんや√』

？　人類とＢＥＴＡの関係に気付けず、原作組と合流してしまう『００ユニット？　何それ美味しいの？√』

？　シリアスに『人類の天敵√』

？　関係ない別の敵を出すことにより、人類＆ＢＥＴＡ初めての共同作戦『夢の人類ＢＥＴＡ連合軍√』

？　そんなことよりおうどん食べたい！

とまあ、こんな感じです。

一応全てのルートの構成は考えてあります。

もちろん、→にない選択肢でこう言うルートもあるのでは？　こう言う展開なら面しれーだろ！　と言う方は是非感想お願いします。

え？　話くらい自分で考えろよダメ作者、ですって？

フッ、凡庸な人間からは凡庸な物語しか生まれないのさ＜キリッ

冗談です、ハイ。すいません……。

ちなみに、このアンケートは一番意見の多いルートに決めると言うわけではないのでその辺あしからず。

それでは！　（＾▽＾）ノシ

アンケートっぽい何か（後書き）

２０１１．１０．６アンケート結果を乗せる日にちを間違えたので、此方を変更。

アンケートっぽい何か　結果発表

アンケート結果発表！

アンケートの結果です。
まあ、まずは見て行きましょう。
こちらです←

？　『原作なんて最初からなかったんや√』　9
？　『００ユニット？　何それ美味しいの？√』　7
？　『人類の天敵√』　5
？　『夢の人類ＢＥＴＡ連合軍√』　１２
？　そんなことよりおうどん食べたい！　１２

となりました。
　他にもいくつかのルートの折衷案や別ルートの案など、自分の妄想を広げてくれそうなネタを提供していただき、まことに有難うございます。

結果としては４番と、以外にも５番が同表で１位。

その後に1，2，3番と続きました。

もうこれは、5番に期待されているってことでいいんでしょうか？

……

……

……。

もうこれは5番で決定でへ（・・、へ）☆／（。ロ。）ナンデヤネン！

前回書いたように1番表の多いルートにするわけでは有りませんので、5番と言うわけではないです。

そしてさらに言うと、この場で進むルートを発表する気も有りません！

タタタタッッ≡≡≡ナンデヤネン！（＊。∇）／☆（ノ。？。）ノハウッ！

もちろんそれでは納得されない方も居るでしょう。

ですがこれは決して、ルート決めるのが面倒くさいとか、もうちょっと待てばもっといい案が出てくるのではないか？　などと言うことを考えているわけでは有りません！（決して！）

作者的には、話の流れを話してしまうより、今後どうなるのか分からないドキドキ感を味わってほしいのです。

とある方から『2次創作の醍醐味はその作者もしくはその作品にしか出せない？どんでん返し〟だ』と言う意見を頂いたのですが、まさしくその通りだと思います。

二次創作とは、原作と言う名の1本の道を、数多くの人が横に向かってまるで木の枝のように道を切り開いているもの、と言うふうにイメージしています。

そして、その1本1本にそれぞれの持ち味が有るわけです。
自分もその1本で有るからには、他には無いこの作品だけの何かを出して行きたいと考えております。
そして、ルートを発表してしまうと大体予想できてしまうのではないかと思いまして……。
こう言った理由から、ルートは発表しないという事になりました。

何だか自分でハードルを滅茶苦茶上げてしまった気がするが大丈夫か？
（多分）大丈夫だ、問題ない（事もない）。

最後に、沢山のご意見ご感想ありがとうございます。
こんなに沢山の人に読んでもらえているのだなと、嬉しい半面不安にもなります。
他の素晴らしい作品を書く人たちに比べて、1段も2段も劣っているこの作者の力量ではどの程度の物が出来上がるか分かりませんが、今後も頑張って行くつもりです。
更新速度が右肩下がりですが、必ず完結させるつもりですので、これからもお付き合いください。
よろしくお願いします。＞（＿　＿＊）＜

第二十三話　諸君　私は（ｒｙ（前書き）

気が付いたらこんな文章だった。
反省も後悔も（以下略
ドーゾ。

第二十三話　諸君　私は（ｒｙ

～前回のあらすじ～
マザー参上！

なんだかお久しぶりです。あれからまだ数時間しか経っていないと言うのに、１月以上待たされたような気がしますね。

只今拠点の上空に居るんだけど、何これ？
皆に気付かれないように、電磁波を吸収する「ステルスモード」で帰ってきてみれば、１本の線を挟んで家の子達と人型兵器（以下ＭＳ（仮）とでも呼んでおこう）が睨み合っていた。
一体どう言う状況？

まぁ、何時までも見ている訳にはいかないので、取りあえずステルスモードを切って降りる。
どうやらＭＳ（仮）はこっちに気付いたようだ。

う、撃ってこないよね？
……。
大丈夫そうだ。取りあえず先にどういう状況か聞こう。

「皆、ただいまー」

『母上！』『遅カッタジャネーカヨ、オ袋』『オカエリデゴンス！』
『オカエリー』

おうおう、元気がいいね相変わらず。

「あれ？　三月やコロ介は？」
『皆地下ニ避難シテイマス』
「避難？　何で？」
『敵ガ近ヅイテキタノデ』
「敵ってあのロボット？」
『ハイ。強イ電磁波ヲ発シテイタノデ』

そう言えば、特定の波長の電磁波を敵と認識するってことを忘れていた。
やはり腐ってもレギオンなのか（腐っては無いけど）。
ふむ、どうしたものか。

……いや、そんな事よりあのＭＳ（仮）を見てくれ。
いや、デザイン的にＭＳと言うよりはＡＣに近いだろうか。
ロボットだ、人型だ、二足歩行だ！
もう一度言おう。
ロボットだ、人型だ、二足歩行だ！
たとえどれ程に人型兵器の有用性が皆無だと言われても、浪漫があれば耐えられる。
大きければ唯の的、小さければ紙装甲。積載量も限られ、運用法も極わずか。
「手なんていらない」「足なんて唯の飾りですよ」「（、神、）＜タンクこそ最強」など、様々なことを言われてきた。
だが、それでも決して諦められない、それどころか更に引き付け

られる、そんな何かが其れにはあるのだ。
人型兵器、巨大ロボット……何と素晴らしい響きだろうか。
全世界３０億の漢(男の子)が憧れて止まない其れが、今此処に、目の前に存在しているのだ。
これがどれ程素晴らしい事か千や万、いや億や兆の言葉で語りつくしたいところだが、如何(いかん)せん俺のボキャブラリーはさほど多くない。
だからこそ、この言葉の中にまとめたい。

諸君、私は人型兵器が好きだ。
諸君、私は人型兵器が好きだ。
諸君、私は人型兵器が大好きだ。

ＭＳ(モビルスーツ)が好きだ、ＡＣ(アーマードコア)が好きだ、ＡＳ(アーム・スレイブ)が好きだ、ＡＴ(アーマード・トルーパー)が好きだ、ＭＡ(メタルアーマー)が好きだ、ＷＡＰ(ヴァンダー・パンツァー)が好きだ、ＯＦ(オービタルフレーム)が好きだ、ＡＳ(アサルトスーツ)が好きだ、ＫＭＦ(ナイトメアフレーム)が好きだ　。
平原で、街道で、凍土で、砂漠で、海上で、空中で、泥中で、湿原で、宇宙で。
全ての世界に存在する、ありとあらゆる人型兵器が大好きだ。

砲身をならべた陸ガンの一斉射撃が、轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ。
地響きを上げ、鋼の巨人が立ちあがる時など心がおどる。
リンクスの操るネクストのＩＮＳＯＬＥＮＣＥ(コジマキャノン)が、敵ノーマルを撃

破するのが好きだ。
悲鳴を上げて燃えさかる機体から飛び出してきた敵兵を、マシンガンでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった。

ランスをそろえたグロースターの横隊が、敵の戦列を蹂躙するのが好きだ。
恐慌状態の新兵が既に破壊された敵機に、何度も何度も銃弾を撃ち込む様など感動すら覚える。

鉄が軋み血と硝煙の臭いがこびり付き、むせる様などはもうたまらない。
泣き叫ぶ敵兵達が隊長の降り下ろした手の平とともに、唸り声を上げる対人兵器にばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ。

哀れな抵抗者(レジスタンス)達が旧式のＭＳで健気にも立ち上がってきたのを、衛星兵器(メント・モリ)の高出力レーザーが軌道上から都市区画ごと蒸発させた時など絶頂すら覚える。

自立型の特攻兵器に滅茶苦茶にされるのが好きだ。
必死に守るはずだった新兵器が奪取され、それを自軍に向けられる様はとてもとても悲しいものだ。

戦車の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ。
重爆撃機に追いまわされ、最低野郎(ボトムズ)のように地べたを這い回るのは屈辱の極みだ。

諸君、私は人型を、ＭＳの様な人型兵器を望んでいる。
諸君、私と同じ人型兵器愛好家諸君。
君達は一体何を望んでいる？
更なる人型兵器を望むか？

情け容赦のない、動物型(ゾイド)のような兵器を望むか？
立体起動の限りを尽くし、旧式兵器を破壊する、ガンダムの様な人型(浪漫)兵器を望むか？

Ω／Ω／Ω／「人型(浪漫)兵器！　人型(浪漫)兵器！　人型(浪漫)兵器！」

よろしい！
ならば人型(浪漫)兵器だ！

我々は満身の力をこめて今まさに振り上げんとする握り拳だ。
だが、この暗い現実の中で四半世紀もの間待ち続けて来た我々にただの人型ではもはや足りない！！

巨大兵器を！！
一心不乱の巨大人型兵器を！！

我らはわずかに一個大隊、千人に満たぬ敗残兵に過ぎない。
だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している。
ならば我らは諸君と私で総兵力１００万と１人の軍集団となる。

人型兵器を忘却の彼方へと追いやり、眠りこけている連中を叩き起こそう。
髪の毛をつかんで引きずり下ろし眼を開けさせ教えてやろう。
連中に男の浪漫を思い出させてやる。
連中に人型兵器の駆動音を思い出させてやる。
二次と三次のはざまには、奴らの哲学では思いもよらない事がある事を思い出させてやる。
一千機の人型兵器の戦闘団で世界を燃やし尽くしてやる。

「最後の大隊、大隊指揮官より全空中艦隊へ」

目標全人型兵器否定派上空！！
第二次人型兵器万歳作戦、状況を開始せよ
征くぞ諸君。（以上文字数稼ぎ）

とまあこんなとこだろう。
皆にもよく伝わったと思う。

所で……、あれには人間が乗っているのだよな？
もしも遠隔操作なのであれば（それはそれで浪漫があるのだが）がっかりだ。
もし人が乗っているなら此処はロシアらしいから、ロシアかソ連の人が乗っているのだろう。
流石に核持っている国は敵に回したくないな。そもそも戦いたくないし。
しかし、このままでは埒が明かないし……。
って言うか人型兵器と対峙する巨大生物ってだけで、負けフラグが立ちそうなんだが……。
うーむ、どうしたものか。

「何て大きさだ。要塞級と同じかそれ以上です」
「こんなにデカイなんて聞いてないですぜ隊長！」
２人とも慌てている。かく言う私も咄嗟のことに頭が追い付いていない。
そう言えば少尉が静かだな。
「大きな星が点いたり消えたりしている。アハハ大きいな……彗星かな？　イヤ違う、違うな、彗星はもっとバーって動くもんな。暑っ苦しいなココ。ん……出られないのかな？　おーい出し下さいよ……ネェ」
何処の言語か分からないが、放心したような顔でブツブツと何か呟いている。
大丈夫か？　今が貴官の本領を発揮すべき時だと思うのだが……？
それより、此方に攻撃の意思がないことを伝えなければ。
「な、何してんですか隊長！」
武器を下ろし、コクピットから両手を挙げながら出る。
「静かにしろ。お前たちも銃を下ろせ。
此方に戦闘の意思がないことを証明せねばならんからな」
「おい新兵！　此処はてめ―の出番だろうが。何ボサッとしてやがんだ！
……お、お～い、聞こえってっか？」

「いくらなんでも危険すぎます！」

イワンの声を無視し、此方から語りかける。

「ベールィストーノシカ、我々に敵対の意思は無い！　繰り返す、我々に敵対の意思は無い！」

此方の言葉は通じているだろうか。

するとベールィストーノシカは、青白く光る触手のようなものを伸ばしてきた。

それはまるで触れろとでも言うかのように、私の目の前で止まる。

私は手を伸ばしそれに触れる。

『人間よ、我々に何か用か？』

そのような声が聞こえた。

それが目の前の巨大生物の声だと理解するのに、少しばかり時間を必要としたとだけ言っておこう。

第二十三話　諸君　私は（ｒｙ（後書き）

ＭＳ：モビルスーツの略。最も多くプラスチックになっている空想兵器。
　陸・海・宙何処でも戦闘可能な万能兵器だが、最近では宇宙人との対話用ツールとしても活躍しているようだ。
　代表例：ザク　作品名：機動戦士～ガンダム

ＡＣ：アーマードコアの略。決してエースコンバットではない。
　頭・胴・腕・足（下半身）のパーツで分かれており、戦場に応じて組み替えることにより、他兵器に無い万能性を獲得。
　数多くのソフトが出ており、来年には？が出るそうな。フロムこそ至高。
　代表例：？＜デデデデストローイ　作品名：ＡＣ

ＡＴ：むせる！　アーマード・トルーパーの略。
　地獄を見れば心が乾く方々の乗り物。基本使い捨て。
　代表例：スコープドッグ　作品名：最低野郎

ＡＳ：アーム・スレイブの略。主人公がドモン・カｓ（ｒｙ
　必ィィ殺ゥゥ、シャァァイニング・ラムダドライバー！
　陸自の奴が好みです。
　代表例：サーベージ　作品名：フルメタ

ＭＡ：メタルアーマーの略。個人的にはモビルアーマーと読んでしまう。
　本編はほとんど見たことがない。→↑→
　例：ドラグナー１型　作品名：機甲戦記ドラグナー

ＷＡＰ：ヴァンダー・パンツァーの略。
ゲーム、フロントミッションに出てくる機体。
代表例：レイブン　作品名：フロントミッションシリーズ

ＯＦ：オービタルフレームの略。
メタトロンを使っているため、めちゃ強いめちゃ早いめちゃ堅い。
個人的にはジェフティよりアヌビスの方が好み。
代表例：ジェフティ　作品名：Ｚ．Ｏ．Ｅ

ＡＳ：アサルトスーツの略。メガドライブ用のソフト。
重厚感がたまりません。
代表例：レイノス　作品名：重装騎兵レイノス

ＫＭＦ：ナイトメアフレームの略。
１番パイロットの安全に気を使っている機体な気がする。
一部ではそんなこと無いが……。
足のタイヤで壁を登ったりしていたが、いくらなんでもあれは無茶な（以下略
代表例：サザーランド　作品名：コードギアス

これら以外の人型兵器も大好きです。
人型でなくても可。（メタルギアとか）
スーパー系も好み（光になれぇぇぇぇ！）

最後にレビューを書いてくれたＵＦＺＫさん、どうも有難うございます。

第三十一話　マザーレギオンの憂鬱（前書き）

ちょっと今回短いです。
ドーゾ。

第三十一話　マザーレギオンの憂鬱

～前回のあらすじ～
イ～～ティ～～（笑）

さてどうしたものか？
と考えていたら、ＭＳ（仮）の胸部が開いて中から女性が出てきた。
結構美人さんだね。
でもそのファッションセンスはどうかと思う。
もしかしてパイロットスーツ？
これは男性陣の士気がウナギ登りでしょうな。
この世界ではロシアは変態なのか。日本だらしね―な。

じーっと見ていると「＃＄＆％＋＞，＊，！＆，，∩×￡＞〒¶～～～～～～～～」と何か話しかけてきた。
話しかけられてもレギオン形態じゃ分からないんですが……。
そもそも其れ何語？　ロシア語？　スミマセン分かりません。
たしかに少しばかりロシア語について学んだ事はありますけど。
いや、勉強したと言っても単語をほんの少し覚えただけだから、全然分からないです。
う～む、こう言う時は……。

ペコペコン！
ほんやくこんｎｙ……じゃなかった、しょくしゅ～。

説明しよう。
翻訳触手とは、翻訳機能の付いたビュートのことである。本来コミュニケーション手段が異なる重頭脳級と何故会話ができたのか、不思議に思ったことは無いだろうか？　実はこの翻訳触手のおかげだったのだ。もちろん魔改造の結果だが、本人曰く「最も役に立った後付け能力」だそうだ。ちなみにこの能力の発動中はビュートが青白く光るぞ。さあ君も、これを使って来たるべき対話の時を成功させるのだ！
（以上作者による説明）

ビュートを伸ばす。
正直撃たれないかドキドキです。
嗚呼胃が痛い（有るか知らんけど）。

よかった、少々おっかなびっくりだったけど触ってくれた。
しかし、妙にエロい格好をした美女ににじり寄る触手……そこはかとなく危ない香りがする。
何を言っているんだ自分は……。
そもそも何を話そう？

「僕は人間だー！」とか言っても、（，　。д　。、）ポカーン状態になるだけだろうし……。
やっぱり此処は『地球外生命体レギオン』として接するべきだろう。
下手に「自分は元人類です」とか言ったら「勝手に人の国の領土に入って来るとはいい度胸だな。金払え！　何？　金がない？　なら今すぐ解剖してやる」って流れになりそうだ。
それは困る！
うん！　やはり知らぬ存ぜぬ、で通すしかないな！
それにある程度強気で行こう。
相手は人類。気を抜けばやられる。
なるべく偉そうに～偉そうに～。

『人間よ、我々に何か用か？』

……。

……。

……うわ――――――！！
何か痒い！　すっごく痒いよ！　そして何故か恥ずかしい！
普段から偉そうに喋るとかしないから、すっごく恥ずかしい！
また心の黒歴史書が１ページ刻まれてしまった～～！！

中々、返事しないな……。
まだ混乱中かな？　まあ、無理もないか。
俺だってこんなデカイ生物が話しかけてきたらびっくりするだろうし。
こっちから話しかけよう。

『混乱しているのか？　まあ、無理もなかろう。
それより、先ずは電磁波を切ってもらえんか？
先程から、我が子らが殺気立っておるのでな』

正直家の子達がキレ気味なんで早くして下さい。

第三十一話　マザーレギオンの憂鬱（後書き）

友人「なあ？」ペラペラ←コミックを読む音

作者「なんだ？」

友「鎧課長って誰かに似てるなって、ずっと思ってたんだよ」

作「へー、誰さ？」

友「通りすがりのサラリーマン」

友「帽子とかがさ……」

確かに似ている

作「ウィンドェ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3934u/

我々は、大勢であるがゆえに

2011年10月30日01時16分発行